平成 23 年度

自己点検評価報告書

目　白　大　学

大　学　院

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	国際交流研究科

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

平成２３年度の国際交流研究科の特筆すべき事項としては、前年度末に発生した東日本大震災の影響である。学生を含む本研究科関係者に直接被害を受けた者はいなかったが、入学辞退者が１名、入学直後に退学が１名、休学が１名と、その影響は大きいものがあった。

＜教育＞

教育に関する事項としては、一昨年度以来課題としてきた論文指導体制強化のため、研究科委員会構成員全員で論文指導にあたる体制を、大学院手当の改訂を機に、学則の変更等により整えることができ、２４年度から実施できることとなったことを指摘することができる。

＜社会貢献＞

研究科としては、特には行っていない。基礎となる学部学科である社会学部地域社会学科の実施している地域フォーラム等に協力している。

＜組織マネジメント等＞

２３年度は定員を充足できたにも関わらず、前に述べたように大震災の影響で３名の減（休学者１名も結局は音信不通となり後日除籍となった）となったことは災害がらみとはいえ残念であった。但し、２３年度入学者は全員留学生である。

（２）今後の課題

最大の課題は、極端に留学生の多い現状をいかに是正するかである。一般・社会人・留学生のバランスの悪さは本研究科の設立の理念を崩しかねない状況である。特に社会人の減少は夜間開講を無意味にしてしまい、設置の根拠がゆるぎかねない。

対策としては、社会人学生の定義を再検討し、高度な教養教育の側面を活用して、自営業・主婦・無職者など幅広い社会人枠を検討すべきであろう。また、一般学生（日本人）の確保については、他大学卒業生の受け入れはもちろんだが、内部進学、特に基礎となる学部学科である社会学部地域社会学科の卒業生に対しては、同一の教員が学生指導に当たっているという連続性を活かして本研究科への内部進学を奨励することも視野に入れる必要があろう。但し、就職難の時代の駆込寺にならないように配慮しなければならない。そのためにも、今のところ留学生が多い故に、比較的必要性の希薄な就職支援の体制作りも急務である。

＜教育＞

２４年度から実施する新しい論文指導体制を実りあるものとするための方策が課題。

＜学生指導＞

留学生が多いためか、学生の動静把握が困難である点がここ数年の課題である。特に、大学全体の中で院生は孤立しているかに見える。学部の留学生会との関わりなど模索してみる必要があろう。

＜組織マネジメント等＞

社会人入学者の増加をはかる方策を検討する。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	国際交流専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①２３年７月に開催された「修士論文の中間発表」は教員の有益なコメントやアドバイスがあり、その後の論文作成指導には有益であった。 ②留学生には日本に関する研究や日本と母国との比較研究をなるべく行うように勧めている。 ③修士論文の要旨についてインターネットによる公開・公表を進めている。 （２）今後の課題 ①修了生の学会や研究会での発表、紀要などへの投稿を奨励する。 特に優秀で当該分野で一般に活用に資すると思われる論文については出版を勧める。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①授業の欠席の多い学生のフォローアップを行った。（病気や就職活動などによる） （２）今後の課題 ①就職活動の助言や就職後の学生のフォローアップ体制をつくる。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①ＪＩＣＡや自治体などとの連携により国際交流に関するプログラムを推進する。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①平成２３年７月に修士論文の中間発表、平成２４年２月に修士論文の最終試験を実施した。 ②広報活動・学生募集強化のため（ｉ）オープンキャンパスでの進学指導相談や相談会を実施し、 （ⅱ）大学・大学院ガイド（日経ＢＰ）に専攻主任の広報インタビューや研究科の紹介を掲載した。 （ⅲ）研究科の案内チラシを作成し関係機関等へ配布した。 （２）今後の課題 ①国際交流に相応しい多様な国からの留学生（現在、中国が大半）と実践型の特性を活かした社会人学生を確保する。 ②留学生と社会人学生との全体のバランスを考えて日本人学生をある程度確保する。 ③将来的には受験科目に英語を課し欧米の文献購読（原書購読）を科目に入れる。 ④外部講師を招き年１－２回講演やセミナー（ワークショップ）を実施し国際交流に適した授業とする。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①修了生の就職などについてフォローアップをする。又、修了生との交流の輪を広げる仕組みをつくる。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	心理学研究科

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

以下、各専攻独自のものは省略し、研究科全体に共通の事項を取り上げる。

①入学者がいずれも定員を下回った。志願者および合格者は定員を上回ったものの(博士を除く)、実際の入学者数は定員を下回った。理由の調査は行っていないが、他大学への合格者の流出と思われる。

②平成 24 年度から開始される長期履修制度を希望する合格者が修士課程 2 専攻に 1 名ずつ(現代心理学専攻 4 年、臨床心理学専攻 3 年)存在した。

③修士論文、博士論文の研究倫理審査の体制が全専攻で整った。臨床心理学専攻および心理学専攻に続いて、現代心理学専攻も体制、ルール作りが終わった。

④現代心理学専攻の論文指導の強化、臨床心理学専攻の実習指導等により、教員の負担が増加している。

⑤東日本大震災チャリティコンサートが平成 24 年 3 月 3 日(土)に開催され、目白大学および心理学研究科有志がこれに協力した。

（２）今後の課題

これも研究科全体にかかわるものを取り上げる。

①優秀な学生を確保するための方策を考える必要がある。そのためのオープンキャンパスや各種媒体を使った学外への PR、教員各自の社会貢献などによって本学の魅力や教育状況を受験生に知らせ、受験生の増加だけでなく、他大学院への流出を最小限にしなければならない。

②長期履修制度による入学者への指導をどのように行うか、まだその体制やルールが未定であり、専攻の教育目標の違いや個人の事情も踏まえて、それぞれ指導のあり方を検討していく必要がある。また 3 月入試での合格者については、長期履修の手続き期間が 4 月にかかるため、再検討の必要がある。

③留年生、修了生(臨床心理学専攻では臨床心理士試験の受験者も含む)への教育的支援のあり方が大きな課題である。現在は教員の個人的支援の部分が大きく、ゼミ活動のあり方の明確化等も含めて、大学および研究科としてサポートできる部分を明確にしたい。また、関連して、修了生のつながりを生かした組織作り(同窓会、研究会等)を考える時期に来ている。

④修了生の就職への支援体制が不十分である。特に、新卒者及び社会人で転職希望者に対する支援は学生個人の就職活動あるいは教員や修了生との個人的つながりによる紹介に頼っている。心理の専門職は狭き門であるが、情報の集約や伝達等、何が可能か検討の余地がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	現代心理学専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①学生の満足度調査（自己点検の一環）によると、カリキュラム全体および大部分の授業に関しては,高い評価が得られている。 ②実技演習授業において、意識的な工夫、充実がはかられた。 ③論文指導体制の検討で、構想発表、中間発表、論文審査などの位置づけを再定義し、方法も若干変更した。それに伴い、従来の最終試験（論文発表会)の位置づけも変更した。 ④学生の修論研究に対する倫理審査の体制とルールは整った。 （２）今後の課題 ①スタートした長期履修生（４年計画の学生が１名）への指導をどのようにしていくか、個別事情を考慮しながら、共通ルールを作り上げてゆく必要がある。 ②研究生の位置づけと指導内容、方法を「再確認」する必要がある。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①修士論文のレベルが一定程度維持されるよう、意識して従来よりも厳しい指導を行ってきた。 その結果、相応の成果が得られたと共に、同じ時間内（２年間）では結果を出せない学生の増加も見られた。 ②この件は、問題意識の共有にとどまり、具体的方針、対策までは決定できなかった。 （２）今後の課題 ①３年以上在籍学生の位置づけの再確認と、指導方法の確立。入学時の学生の学力レベル、準備状態と、専攻が期待する修士論文レベルの矛盾の解決をはかる必要がある。 ②その前提として、該当学生の考えや意識の確認もする必要がある(アンケート、面談など)。 ③春学期（９月）修了生に対し、１～６月の期間のＴＡの援助をどう保証できるか。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①多くの教員が学生の指導や世話に費やす時間が増えてきている。その結果自由な時間が減少し、そのため社会貢献などに費やす時間が減ってきていると感じている。 （２）今後の課題 ①教員個人ではなく、研究科、専攻としての社会貢献活動は可能か、検討する。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①３年以上在籍生や、研究生の指導に対する位置づけ、ゼミ所属やゼミ活動との関係、ゼミ運営費の保証など問題点が指摘されている。→下りてくる方針と現場の運営の実態とのズレがある。 （２）今後の課題 ①上記の矛盾、ずれている事項の解決をはかる。 ②当専攻も開設１１年目に入り、専攻のコンセプト、カリキュラム、時間割の作成方針など再検討する。
その他	（１）特筆すべき事項 ①学生からの授業評価の、学生へのフィードバックは教員個人で行われている状態で、専攻としてのシステムは不備。効果的な活用にまでは至っていない状態である。 （２）今後の課題 ①修了生に対する卒後教育の検討。修了生の進路調査。 ②修了生と専攻または研究科との共同の活動や行事　（研究会、講演会、同窓会活動等々）の検討。 ③久し振りに定員が割れてしまったので,早急に対策を打つ。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	臨床心理学専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①平成 23 年度秋実施の臨床心理士資格試験の合格率は現役 65.2%であり、昨年(63.2%)を上回る合格率を達成した。 （２）今後の課題 ①現役の合格率は全国平均（61.3%）レベル以上を維持しているが、平成 20 年度の現役合格率 80%を目標としたい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①24 年度から導入の長期履修制度を利用する社会人学生の入学が 1 名決まった。3 年かけて修了の予定である。 （２）今後の課題 ①臨床心理士試験の不合格が 2 年以上のいわゆる多重浪人学生が 6 名おり、今後の指導課題である。 ②長期履修生の臨床実習をどのように進めるか、指導の方針を決定する必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①平成 24 年 3 月 3 日（土）17：00～18：30 まで、研心館にて新井英一氏による東日本大震災チャリティーコンサート「命の挽歌、人間たちの祈り」を実施した。近隣の方にも公開し、集まった浄財は震災遺児に贈られた。大学および心理学研究科有志がこれに協力した。 （２）今後の課題 ①心理カウンセリングセンターでの相談活動及びスーパービジョンの負担軽減のため、効果的な運用方法の検討が必要である。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①現状の教員体制で、学生指導(実習、論文指導)を中心とした専攻の円滑な運営を行うために、学科教育とも絡めて、役割分担や教員増等を検討し、教員の負担軽減を図る必要がある。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①全国的に臨床心理士志望者が減っており、優秀な学生を確保し、臨床心理士を養成するための方策（定員の再検討、FD の充実等）が今後の課題となろう。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（博士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	心理学専攻【博士後期課程】

自　己　評　価　※箇条書きにて記入
（１）特筆すべき事項 ①23 年度入学者は 1 名で、定員 3 名を下回った。 ②博士論文に関わる研究倫理審査を 1 名行った。 ③平成 24 年 2 月 15 日（水）に平成 24 年度春学期（9 月修了）予定者のための博士学位請求論文の予備審査、および構想発表会（1 名）・中間発表会（3 名）を行った。それぞれ全員合格となった。平成 23 年度の学位取得者はなかった。 ④平成 24 年度入試が行われ、定員 3 名のところ、2 名が合格した。 （２）今後の課題 ①受験者の増加が課題である。定員 3 名のところ、24 年度入試は受験者が 3 名であったが、合格できる実力の者はその一部である。この傾向は開設当初からの課題である。 ②23 年度は博士の学位取得者がなかった。査読付きの学会誌に掲載される論文を作成することが困難な状況が続いている。 ③修了者が研究者あるいは高度に専門的な職業人としての職に就くことが非常に困難である。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学研究科

自　　己　　評　　価　　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

大学院博士課程後期３年在学中であった、横山和夫氏が７０歳を越える年齢で、博士（経営）を取得した。
当該研究科博士後期課程は平成２０年４月開設であるので、横山氏は大学院博士開設と同時に入学し、３年間で学位取得したこととなる。
なお、博士後期課程開設より３年間が経過したので、本課程は完成年度を経過したこととなる。
高橋武則教授（品質工学、品質経営）が大学院博士後期課程指導教員となった。

（２）今後の課題

今後、博士〇合の教員が定年を迎えるので、若手教員を育てて、その後任とすることが喫緊の課題である。
大学の評価は、大学における教育と研究の二つで評価される。大学院博士後期課程は、主として研究分野を担当するものである。本研究科の研究水準を上げるためには、博士〇合教員の研究経験を、若手教員にいかに伝えていくかということにかなりの部分を依存している。このためには、大学院フォーラムの充実、研究科内における研究会の開催、シンポジウムの開催等が考えられる。しかし、実際のところ、各教員が教務、学務などの学内事務、学部教育に多大な労力を割かざるを得ないのが実状である。今後は、研究科内の研究環境をどのように整備するかについて考える必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①授業評価を実施した。(「経営学フォーラムⅠ・Ⅱ」の講義においてに全科目のアンケートを配布し翌週の同科目講義時間終了後に回収) （２）今後の課題 ①大学院入学以前の専門的知識が不足している学生への指導内容について検討する。 ②留学生入試による学生と一般入試による学生の入学目的の相違により生じている個別問題を検討する。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①社会人学生に対するインターネットやメールを用いた論文指導の実施をした。 ②丁寧な論文指導を実施した。 （２）今後の課題 ①教員１人当たりの学生数の偏りが見られることから改善を図る必要がある。 ②研究科内教務事務を研究科の責任により計画的に行い予測可能性を確保したものとする。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①公開講座開催 7 月 13 日「経営情報システムと ERP」 7 月 20 日「チェーン小売業におけるビジネス・モデルの転換と背景：　小売業の宅配ビジネスの発展」 11 月 30 日「ERP の本質を考える」 12 月　7 日「コンサルティングファームの実像：　現役戦略コンサルタントは語る」 12 月 14 日「確率、ファジー測度の概念と応用」 12 月 21 日「クオリティ（顧客満足）の保証と創造のマネジメント：　一流企業や老舗のクオリティは何故素晴らしいのか」 1 月 11 日「企業価値の基礎について」 （２）今後の課題 ①時宜を得た、公開講座を実施することにより、参加者増加を図る。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①定年を迎える教員の後任人事を計画的に進めることにより透明性と適格性を図る。 ②計画的な研究科会議の開催を行うことにより議事進行の透明性と正当性の確保を図る。
その他	（１）特筆すべき事項 ①会計学コース（会計学専攻）の入学者が減少傾向にあることから（平成 23 年度は、1 名）入学生を確保するための方策を検討する。 （２）今後の課題 ②日本語を母国語としない学生の基礎学力の低下が見られることから、「特定課題論文」の作成を推奨し専門科目を多く履修することにより専門知識の充実を図る。すなわち、「育てて送り出す」ことを目標とする。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（博士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学専攻【博士後期課程】

自　　己　　評　　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

①大学院博士課程後期３年在学中であった、横山和夫氏が７０歳を越える年齢で、博士（経営）を取得した。
当該研究科博士後期課程は平成２０年４月開設であるので、横山氏は大学院博士開設と同時に入学し、３年間で学位取得したこととなる。
なお、博士後期課程開設より３年間が経過したので、本課程は完成年度を経過したこととなる。
高橋武則教授（品質工学、品質経営）が大学院博士後期課程指導教員となった。

（２）今後の課題

①日本の経営を担う人材と目白大学の教員となって研究科の将来を託せるような人材を育てることが今後の課題である。
②大学の評価は、大学における教育と研究の二つで評価される。大学院博士後期課程は、主として研究分野を担当するものである。本研究科の研究水準を上げるためには、博士○合教員の研究経験を、若手教員にいかに伝えていくかということにかなりの部分を依存している。このためには、大学院フォーラムの充実、研究科内における研究会の開催、シンポジウムの開催等が考えられる。しかし、実際のところ、各教員が教務、学務などの学内事務、学部教育に多大な労力を割かざるを得ないのが実状である。今後は、研究科内の研究環境をどのように整備するかについて考える必要がある。
③大学院教員が教授のみということで、バランスが悪い。今後は、准教授も大学院担当の教員に昇格できるように、研究環境を整えて、論文の執筆活動を旺盛に行ってもらう。それによって、国内の学会のみならず、国際的にも本学の認知度を上げていかなければならない。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉研究科

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

＜新たな資格取得コースの設置と適用の開始＞

平成 23 年度から「幼稚園教諭・専修免許取得コース」を創設することを文部科学省より認可を得たことにより、カリキュラムの多様化を図られた。これにより、今年度はこの資格の取得を目指して子ども学科より２名の入学者があった。

＜入試方法の見直し＞

平成 23 年度から AO 入試の導入、一般入の試験科目から英語を外すなど大幅に変更とし、更に一般的に社会人にとって不得意な科目受験をゆるやかにして、社会人体験・現場実務の能力や研究計画の是非を主に合否を判定し、門戸を広げた結果、前年度が２名の入学者であったのに対して６名が入学し、そのうち、１名が AO 入試、２名が社会人入試を利用して入学した。また、外国籍の院生が初めて１名入学した。入学者のなかには、丁寧に論文指導や授業をおこなう必要のある人もおり、入学システムの在り方や指導法に課題が残った。また、24 年度入学生から、全大学員で社会人が多忙な業務を果たしながら学ぶため、長期履修生制度が導入された。

＜研究指導体制の強化＞

平成 23 年度に定年前退職者２人があった。人間福祉学科所属の退職教員の後任人事では大学院担当者は補充されず、退職教員を大学院客員教授として授業を継続することとした。また、子ども学科の退職教員は非常勤講師として今年度はこれまでの科目を担当することとし、新採用の１名を大学院兼務（研究指導補助教員）として退職教員が担当した院生の指導をおこなうこととした。また、保育学専攻で修士論文指導の教員を補充するため、新採用の教員を含めて新たに子ども学科の教員３名を大学院兼務（研究指導補助教員）として昇格させ、いずれも大学院資格審査会で認定を受けた。

＜多様な研究・調査の場の確保＞

生涯福祉専攻科教授（平成 23 年度から非常勤講師）の主宰する NPO 法人「障害者就業生活支援センター」（学内に本部設置）と、別の教授主宰の NPO 法人「福祉フォーラム・ジャパン」（学内に支部設置）を設けている。この NPO 活動への参画及びシンポジウム等への参加を院生に勧めたところ、前者については院生が修士論文のフィールドワークの場として活用し、後者についても各種企画への参加者が増えてきている。

＜外部団体主催の講座への共催・協賛＞

今年度から学内で開催される外部団体が主催する研究会･シンポジウムに生涯福祉研究科を協賛や共催として明記するようにした。具体的には、’23 年５月の「学内 NPO 法人障害者就業生活支援開発支援センターGreen Work21 研修会」で協賛、’24 年３月の「日本学校ソーシャルワーク学会関東甲信越地区「スクールソーシャルワーク」シンポジウム」で共催とした。

（２）今後の課題

＜応募人員・入学人員数の確保策＞

今年度、初めて外国籍の院生が入学したが、中国人を主に留学生の応募は多くなり、24 年度は 3 名が入学することとなった。しかし、語学力の弱さや専門分野における基礎的知識の乏しさから、入学後の指導が教員の負担になることも予想されるため、入学者確保とともに一定レベルの院生の入学を目指した入学試験形態について検討する必要がある。

＜教員人事＞

教員人事については、専任教員の全員が学部兼務（子ども学科及び人間福祉学科）であるため学部の人事が優先され、大学院の人事もそれに従わざるを得ない難しさがある。今後、基幹科目を非常勤講師に依存している状況を打破するため、学科に新たな教員の補充が予定されていないことから大学院専任の特任教員などの採用を求めることも必要であろう。

＜生涯福祉研究科の活動＞

生涯福祉研究科を社会に広く周知するための努力、たとえばシンポジウムの開催などを、人間福祉学科および子ども学科と連携しておこなう必要がある。

＜実践的研究の推進＞

生涯福祉研究科の特色である多様な研究・調査の場（NPO 法人「障害者就業生活支援センター」や NPO 法人「福祉フォーラム・ジャパン」）更に活用するとともに、院生が在職する施設と連携して実践的研究を推し進める必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	生涯福祉専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①少人数制対話形式による授業形態 ②院生の選択による修士論文指導教員の決定と一対一のきめ細かい論文作成指導の徹底 ③修士論文審査時の主査と複数の副査による論文評価と教員のコメント用紙記入による院生へ詳細なフィードバック ④社会人の臨床経験の理論化の視点からの教育と社会人の再教育役割の提供 ⑤院生の臨床現場（障害者就労支援施設・母子生活支援施設・養護施設・発達障害児支援施設・重症心身障害者など）への参加による理論と臨床実践の促進による修士論文の深化 （２）今後の課題 ①定員割れに対する院生確保対策 ②論文作成のためのフィールドや調査対象者確保の困難さおよび倫理的配慮の問題 ③社会人が多く、院生に時間的余裕がないために、指導が十分できないことへの対応と具体的な論文執筆に関する指導の充実
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①少人数であるので、一人一人の関心と興味に合わせた学習や指導が行き届くこと。 ②福祉現場で働きながらの学習や論文指導に当たる学生も多いので、現場体験を踏まえた指導と研究の方向性についての踏み込んだディスカッションが可能であること。 （２）今後の課題 ①福祉・保育現場への勧誘－実習・研究会・講演会・研修会への参加費の援助と勧誘
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①目白大学内に、NPO 障害者就業生活支援センターの運営 ②大学内に、NPO 障害者就労支援チャレンジショップの運営と障害者による販売実習の支援 ③大学内に、NPO 福祉フォーラム・ジャパン（医療・保健・福祉分野での交流・研究・事業開発など）の支部設置 （２）今後の課題 ①大学内設置の障害者就労支援チャレンジショップへの学生・院生の補充と教育による支援活動の継続 ②NPO 福祉フォーラム・ジャパンを設置・デンマーク・ネストベスト市との交流事業（現地での介護実習）などに院生参加を勧誘
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①月１回の専攻科会議の開催による教員間の共通認識と役割分担（教務・入試・評価・倫理委員会）の徹底 ②入試方法の変更と業務分担の徹底（入試回数の拡大・オープンキャンパス・進学相談会・メール等による個別相談の充実） ③修士論文公開発表会（年２回）の実施と院生との修了記念会の実施 （２）今後の課題 ①院生に関する会計事務に関する担当者の確保
その他	（１）特筆すべき事項 ①平成 23 年度から幼稚園教諭専修免許取得コースを設置（文科省認可済）、保育学修士を目指す院生や現職の保育士にとって魅力を加える。 ②平成 23 年度から幼稚園教諭第 1 種免許所持者ら（主に子ども学科卒業生対象）が大学内に設ける教職課程（教職パックを活用して小学校教諭第 1 種免許を取得できるコースを設置 ③院生確保のため子ども学科の保育・教育実習あいさつまわりの際、大学院パンフレットの配付および子ども学科公開講座の案内書送付の際に大学院のパンフレットを同封することとした ④子ども学科で年２回開催している公開講座を平成 24 年度より大学院と協賛とした （２）今後の課題 ①院生募集要項等の作成と宣伝。 ②社会人・学部生への情報拡大方法の検討と院生数の増加への努力が課題。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	言語文化研究科

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

＜英語・英語教育専攻＞

学生数 13 名（留学生 5 名）。平成 23 年度は５名が修了した。専任教員は 12 名（兼担教員を除く）、うち研究指導教員４名。入学定員は 10 名、収容定員は 20 名。徐々に改善をみているが、学生募集は必ずしもうまくいっていない。今後の中長期的な対策を研究する必要がある。公開授業およびシンポジウム等研究会を開催し、学生・教員の研究能力の向上をはかるとともに対外的な知名度の向上をもはかっている。この面での努力は今後も継続してもらいたい。

＜日本語・日本語教育専攻＞

学生数 29 名（留学生 21 名）。平成 22 年度は 14 名が修了した。専任教員数７名（兼担教員をのぞく）、うち研究指導教員３名。入学定員は 10 名、収容定員は 20 名。言語文化研究科３専攻のうち、学生募集状況の最もよい専攻である。専任教員不足による指導体制の脆弱さが問題視される。研究指導教員の３名は毎年６～８名前後の学生を指導することが常態になっている。日本語学科および日本語教育センターと合わせた観点からの人的補強を含めた教育体制の見直しが必要である。

＜中国・韓国言語文化専攻＞

学生数 24 名（留学生 16 名）。平成 22 年度は４名が修了した。専任教員数８名（兼担教員をのぞく）。研究指導教員は４名。必要に応じて研究指導補助教員が主指導教員となっている。入学定員は 10 名、収容定員は 20 名である。留学生が 74％を占める。中国言語文化を専攻する学生は、100％留学生である。入試に当っては、良質な学生を確保すべく厳選に努めている。韓国言語文化を志願する学生は留学生よりも社会人学生が多く志願者は増加する傾向にあるが、定員未充足の状況が続いている。学外における教育機会を多元的に用意するなど、多様な学生に対する柔軟な指導体制を構築するよう留意し努力している。

（２）今後の課題

平成 23 年度は設置４年目にあたり第４期生を迎え入れた。第３期生が修了年次となり、修士論文等の指導がさらに本格化し、前年度の反省にもとづき、教育指導体制の点検を行いつつ、科目名称の変更など改善向上をはかったが、学生に対しより効果的な指導を行なう工夫が今後とも求められる。

学生募集の点では、日本語・日本語教育専攻を除き定員未充足であり、学生募集の問題の解決は開設以来の努力目標であることに変わりはない。当面は良質な修了生を社会に送り出し続けることが肝要であると考える。

外国語学部各学科卒業生で修士の学位を必要とする者が乏しく、学部からの志願者が極めて少ない状況にあることも、何らかの切断面から問題視する必要があると思われる。

前年度以上に留学生の比率が多くなっている。これに対し教員側も個々の学生の状況に応じたきめ細やかな指導をすることが求められている。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	英語・英語教育専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①言語部化研究科共催、平成 23 年 6 月の外国語教育研究会では、平成 22 度英語・英語教育専攻修了生 1 名が「私はどのように修士論文に取り組んだか」というタイトルで、作成に関する苦労話、研究方法開発の努力などについて具体的に語った。修士 2 年生だけでなく、1 年生に関しても、論文作成の有益な情報と、よい動機づけが得られ、積極的な研究への取り組みにつながった。 ② 英米語学科共催公開シンポジウムでは、新しい大学英語カリキュラムへの取り組みについて、各方面から提案があり、現代の大学の新しいカリキュラムの可能性について、院生の視野をひろげることにつながった。 （２）今後の課題 ①授業や研究会では様々な角度から討論の活発化を図る。さらなる進展をめざし、様々な角度から、修了生との交流を推進する。 ②研究レポート発表、英語でのディスカッション等を多く取り入れ、授業内容のいっそうの充実をはかり、新しい視点から研究方法を編み出せるよう、指導する。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①研究会や懇親会を企画し、修了生や院生同士の交流をはかった。 （２）今後の課題 ①授業の単位は取れるが、修士論文の執筆が思うように進まず、落ち込むタイプの学生に対しては、よりきめ細かな心のケア及び論文作成方法に関する指導を行うべきである。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①公開のシンポジウムや研究会を実施しすることにより、地域の人々で、英語学や英語教育に興味のある方々の自由参加を促した。英語学や英語教育に関する興味を広げることに貢献できた。 （２）今後の課題 ①地域社会の研究の一助となるよう、さらなる魅力的な課題を提供する必要がある。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①大学院教育の質の向上をめざし、授業、研究会発表、シンポジウムの公開を行った。これにより、英語学研究者、英語教員、出版社編集者との交流が促進された。外部の研究者や有識者の情報や発言に刺激を受けることにより、院生は、研究や専門知識を大いに深めることができた。 ②専攻会議を随時実施し、組織の円滑な運営を目指した。 （２）今後の課題 ①質の高い合格者を確保することはできたが、定員を満たすことはできなかった。来年度は、定員の充足を図るとともに、より研究意欲の高い学生の獲得をめざす努力が必要である。
その他	（１）特筆すべき事項 ①研究会・シンポジウム・公開授業の開催 ○ 6 月 11 日(土)第 3 回目白大学外国語教育研究会　参加者約 30 名　修了生シンポジウム「私はどのように修士論文に取り組んだか」 発表：「陸奥廣吉『日本語会話コース』の考察 一馬場辰猪『日本文典初歩』との比較を中心に一」 金沢朱美（目白大学教授） 講演：「SLA における動機づけの研究の『これまで』と『これから』」稲垣 善律 （津田塾大学准教授） ○10 月 29 日(土) 公開シンポジウム「日本の英語教育を発信する(第 4 弾)―カリキュラムからテストまで―」 参加者約 50 名 基調講演『文法テストはこのままでよいのか:文法テストの歴史と未来』 根岸雅史 （東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授） シンポジウム『新しい大学英語カリキュラムへの取り組み』 ・「ICU の EAP カリキュラムと英語による授業」富山真知子(国際基督教大学教授) ・‘An English Curriculum for International Study -- both in Japan and Abroad’ Victoria Muehleisen (早稲田大学国際教養学部准教授) ・「英語に浸るカリキュラム」眞田 亮子 （目白大学大教授） ○公開授業 ・11 月 3 日(木)早期英語教育学「小学校英語教育とバイリンガル」岡秀夫 参加者 7 名 ・12 月 12 日(月) 言語統計論 時本真吾　参加者 2 名

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	日本語・日本語教育専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①２４年度に向け、修士論文指導教員の１名増員が認められ、教員の負担減になった。 （２）今後の課題 ①留学生増加のもと、学生の日本語力の低下に対応する方策を考えねばならない。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①２年次生１４名が、全員修士論文最終試験に合格した。 ②１名の脱落者もなかったのは、研究科開設以来初めてであり、評価したい。 （２）今後の課題 ①日本人学生の減少対策が急務である。 ②合格しても手続きをしない、手続き後に取り消すなど、「日本人離れ」に対応せねばならない。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①優秀な２年次生の論文草稿を、外部研究会で発表させ、さらなる充実を図ることができた。 （２）今後の課題 ①上記のような試みを続けて、学生の意識向上を図りたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①本専攻の基盤となる、学部日本語・日本語教育学科教員に対し、中間発表会、修士論文最終試験を、学科ＦＤとしている。今後も継続したい。 （２）今後の課題 ①学外非常勤講師の教員との意見交換などを意識的に図る必要があるのではないか。
その他	

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	中国・韓国言語文化専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①中国関連と、韓国関連とに、専門分野を分けながらも、東アジアを視野に、院生が学習・研究できるカリキュラムが構成されている。 ②中国関連と、韓国関連とに、専門分野が分けられていて、それぞれ異なった学位が取得できるようになっている。 ③現地に赴いて事象の理解を深め、資料を収集する「臨地研究」の科目の充実が図られている。 ④地震・津波・原発爆発で、心理的にも経済的にも、留学生の在学に不安が生じた。 （２）今後の課題 ①大学院生の身心の健康をはかることを、当人達に喚起したい。 ②経済的支援の方法を講じたい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①修士論文を４名が提出し、４名が修士の学位を取得した。 ②留年する大学院生を多く抱えている。 （２）今後の課題 ①論文指導を受ける科目「論文指導演習」は１年次・２年次、つづけて履修できるようにするのが望ましい。 ②他大学大学院で行うように、同一名称科目を、連続して履修でき、単位取得できるように考えて良いと考えられる。（毎年内容が変わるのであるから可能である。）
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①日本中国語教育学会、日本韓国語教育学会の大会、研究会等において、当該年度は本学キャンパスが会場となり、本学教員が役員として活動した。 ②各種学会、研究会において、本学教員が役員として活動し、学会をリードしている。 （２）今後の課題 ①24 年度も本学を諸学会、研究会会場として、対応することになる。その際には有効な大学院生の協力体制をつくることが求められる。 ②研究者交流を考えたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①中国関連、韓国関連ともに、博士課程を修了、または満期退学して、識見を有するもので構成されている。 ②中国関連は、科研費にも応募して、活発な研究活動を行っている。 ③韓国関連は、活発に研究しながらも、科研費には手続煩瑣を避けて応募がなかった。 （２）今後の課題 ①若手の研究者が博士号を取得するように、働きかけて行く。 ②韓国関連は研究ができるように、教育から研究に力点を移せるように、マネジメントすべきである。
その他	（１）特筆すべき事項 ①定員割れを起こしている。中国関連は志願者も多く充足可能状況にある。韓国関係は志願者が少ない現状がある。 ②韓国関連は学部に優秀な学生を有しながら、博士課程がないことから、他大学大学院に進学する例を見いだす。 （２）今後の課題 ①定員対策からも、中国関連、韓国関連の分離を想定する時期であることも、考えられる。 ②博士課程の設置を望みたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学研究科

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

22 年度の論文指導の経過で、看護学研究科より長期履修制度が発議され、23 年度には、目白大学院の長期履修制度（3～4 年）が制度化された。

＜入学選抜＞
一般・社会人を対象に実施し、3 期生 15 名（23 年度）の学生を迎え入れた。3 期生も入学生全員が有職社会人であることから、本学の教育の目的である、高度専門職業人養成と有職社会人が学びやすい教育プログラムが一定の評価を得たと認識している。内訳は、医療施設の中間看護管理者、看護教員、臨床助産師といった職域で、年齢的には中堅層の学生を多く受け入れている。また応募者は、卒業生、在学生の推薦、紹介が見られるようになってきた。
本学が、設置の目的に沿って教育を開始するにふさわしい学生が入学することによって、設置の目的の一歩が達成され定着していくと考える。

＜教育課程と教育指導＞
4 月開学と同時に、入学オリエンテーションを開始し、本研究科の特色である昼夜開講制（月～金：18：30～21：40）土（9：00～16：10）、セメスター制、コースワークの充実、計画的な研究指導は、予定どおりに実施された。
また、個々人の学習環境に応じて、研究指導等の授業日や時間を最大限配慮しているところである。教員のみならず、大学院キャンパスの事務室がきめ細かい学修および学生生活の相談に乗っている。

＜教育研究の質向上＞
大学院教育の充実と教員の資質の向上を図るため、研究科委員会を 4 月に組織し、月 1 回定例化している。また、目白大学の大学院学務運営会議には研究科長が構成員となり、全学的視野で大学院教育・経営に関する課題を共有することとしている。この会議では、看護学という研究分野を超えた大学院教育の在り方について学ぶところが大きい。加えて、本研究科は、看護学専攻 3 分野（看護マネジメント分野、コミュニティ看護学分野、ウイメンズヘルス看護学分野）各々が、演習科目、特別研究においてチームティーチングをおこなうための会議をもち、教員間のコミュニケーションを密にしている。
また、研究科の特色でもあるコミュニティ看護学研究のフィールドとして「保健医療村」（和光市近隣の地域、国立病院機構埼玉病院及び本大学院が参与する地域の健康推進構想）の共同研究が 2 年目にはいった。23 年度は独立行政法人国立病院機構埼玉病院のがん患者及び家族を対象とした地域ヘルスプロモーションのニーズ調査を実施した。
また、22 年度の「がん地域医療の実態調査」の報告書をもとに、報告会を実施した。（いずれも目白大学特別研究費の助成による 3 年計画）
23 年度の研究成果が 24 年度の地域のヘルスプロモーションプログラムと教育にフィードバックされること、このフィールドで院生が引き続き研究成果を出していくことを期待したい。

＜教員組織＞
学部と大学院が別地にあることによる教員の負担軽減については、学部キャンパス、大学院キャンパスを往復するシャトル便を走行させ、移動はスムーズに行われている。また夜間授業への配慮として、学部授業や校務の調整がある程度実現できていると考えるが、学部実習指導を担当している教員の早朝から夜間勤務は、体調管理に留意する必要がある。

＜学生の履修状況＞
2 期生.3 期生ともに履修申告通りに単位を取得した。また、2 年次生は、5 月論文構想発表会及び 12 月の論文発表会に 1 期復学者 1 名を合わせて 16 名全員が臨んだ。
1 年次生も休学者 1 名を除き 14 名全員が 3 月研究計画書を提出した。また、学生たちは、職務と学業の両立という厳しい学習環境ではあるが、入学当初の確固とした目的を持って学修に臨んでいる。その期待に応えられる教育を展開する必要があると考える。休学者に対しては、指導教員が休学中のケアをおこなっており、学習の意欲を失わないように指導している。

（２）今後の課題
①大学院の将来構想について
②カリキュラム検討会の結果を踏まえた教育計画、教科目配置の変更
③24 年度からの長期履修生に対する教育計画、運用について
④①に関連して大学院組織の検討

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究科（修士）用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学専攻

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①2年次生16名が修士論文および最終試験に合格した。半期休学していた学生もスムーズに復帰し学業に専念できた。 ②カリキュラム検討委員会を設け、共通科目について検討を重ねた。24年度に決定予定。 ③ほとんどの学生が社会人であり役職にもついていることから、長期履修制度を検討し決定した。 （２）今後の課題 ①開講していない科目がありカリキュラム検討委員会において継続検討する。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①修了生が関連学会で研究成果の発表を行った。 ②昨年度検討課題であった関連学会や研究会に学生が参加できるよう勧め、２分野（ウィメンズ看護学、コミュニティ看護学）においては実施できた。 ③昨年度と同様、年度末に学生および教職員の懇談会を開催し教育全般について意見交換を行った。 （２）今後の課題 ①論文審査の基準は設けているが、個人の見解に解離があり主査・副査で議論があった。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①地域保健医療計画研究を通じて、がん予防に関する地域の患者およびその家族のニーズ調査を行った。合わせて、昨年度の地域の福祉･医療系施設に調査を行った結果を踏まえ､国立病院機構埼玉病院と協働で研究報告会を開催し、和光市近郊の薬剤師会および訪問看護ステーション等との連携の土台の構築を図った。 （２）今後の課題 ①病院看護職を対象とした大学院授業の公開（研究方法など）
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①23年度より５名の論文指導教員が認められた。 ②学生募集のために１月～2月随時相談日を設けて教員が対応した。 （２）今後の課題 ①分野によって、指導教員と学生数のアンバランスがある。 ②専任教員の実習指導中における夜間の授業等の負担があるが改善されていない。 ③授業や実習など学部教員との調整を行う特定の教員に負担がいかないように調整するが、限界があり検討が必要。 ④図書室特に増冊に努める。
その他	（１）特筆すべき事項 ①学生確保のためにリーフレットを作成し関連学会等で配布した。 ②学生確保においては、在学生の協力で後輩や仕事仲間へ働きかけ24年度に入学している。 ③コミュニティ看護学分野の入学生ニーズとして、保育園在職中の看護職が増えつつある。 （２）今後の課題 ①目白大学大学院の知名度を上げる。そのために、教員の学会役員などの活動が効果的であるが、大学・大学院業務とのバランスの問題もあわせて検討が必要である。 ②学生定員は確保できているがまだ分野にばらつきがある。特にコミュニティ看護学分野においては、保育園在職中の看護職のニーズに適したプログラムを持っているが、それだけでは人数確保にはつながらない。継続してニーズの堀り起こしが必要である。

学部・学科

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	人間学部

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

＜人間学部の目標＞

人間学部では、21 世紀の新たな時代に生きる人間としての資質・能力、技能を高めるための理論と実践を明らかにし、学生に人間教育の理論を学ばせ、かつ確かな実践力をもった専門家として「育てて送り出す」教育を具現化していくことを目標としている。

心理カウンセリング学科では、こころの諸問題に対して支援できるための理論と技術、人間福祉学科では、人々が豊かな人生を送るための福祉サービスをするための理論と技術を、子ども学科では、子どもが健やかに成長するために、子どもを支援するための、そして児童教育学科では、児童の健全な成長と発達に必要な援助や教育に関する理論と技術を学生に伝え、習得させていくことを使命としている。

＜平成２３年度の各学科の教育活動の総括＞

①研究面

・各学科により研究の特徴がみられる。学会論文寄稿、研究論文・海外発表などに積極的に取り組む学科（心理カウンセリング）と教育現場の実践を探求する研究に力点を置く学科（人間福祉・児童教育・子ども学科）があった。
・科学研究費応募。特別研究費への応募への取り組みにも学科の差異がみられた。
・人間学部の各学科が共通して、地域や多様な教育施設との共同研究や実践研究に取り組んできた。

②教育面

・学生の学習意欲の喚起、授業規律の確立など、授業改善に関わる取り組みは各学科共通して取り組んできた。
・行事を指導の柱とする学科、教育現場への参加の重視、地域連携・ボランティアの奨励などは特色ある教育活動が展開されてきた。
・各学科とも、学級担任の業務の確認、ゼミ指導など、きめこまかな学生指導に各学科とも取り組む姿勢が見られた。

③今後の課題

・学科間の連絡・調整・情報の交換、学内各組織と学科の活動との連携をすすめる。
・国家試験対策を重視し、合格率を高める。
・キャリア教育の充実、採用試験対策を強化する。

上記の課題を達成するため、各学科のカリキュラムの見直し、達成目標の明確化、連絡調整機会の設置などが課題とされている。

（２）今後の課題

①人間学部各学科の連携

人間学部の四学科は互いに深い関係にあり、学生には他学科の授業にも参加する機会を与え、広い視野から、人間の健全な成長に関わる専門家としての確かな力量を高めさせていくことを目指す。

このための具体策として、

・学部共通科目の見直し、設置する科目・科目数の各学科の教務委員等による検討の具体的推進。
・地域の教育委員会との連携を促進する。心理カウンセリング学科は新宿区教育委員会と児童教育学科は中野区教育委員会と連携した活動を展開している。また人間福祉学科、子ども学科は様々な地域、教育施設と協働している。これらを関連させ、目白大学人間学部として、地域教育への貢献、多様な教育資源の活用による本学教育の有効な促進を図る。
・多様な教育資産の開発・活用も共同で進める。
・学科連携のための話し合いの場の設定を進める。２２年度の学科の特質事項にも記されていたごとく、心理カウンセリング学科と人間福祉学科の相互補助による活動など、子ども学科と児童教育学科の芸術関連科目の相互担当など、学科間の協力による実践が散見できる。こうした連携の具体的促進を図る論議の機会を設置したい。
・本学人間学部に共通した、学習方法の改革に取り組んでいく。

②教育課程の内外における　社会的・職業的自立の重視

大学教育の新たな方向として「課外の様々な指導を通じて有機的な関連」が示されている。この背景には、「学びから就業への円滑な移行ができていない」現状の改善が大学教育の緊要の課題となっていることがある。

「課外の様々な指導を通じて有機的な関連」を考察するに、知識基盤社会から要請されている、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」を育成するために、大学教育のあり方を改善する必要を示唆していると受け止めることができる。

それは、大学内部における教育活動全体および授業の改善を図ること、それに加えて大学を中心としつつ多様な教育資源の活用、さまざま教育　機関や地域とのネットワークの構築の必要に収斂できると考える。これらを次年度も鋭意具体化し実践していく。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	心理カウンセリング学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①予定通りに外部講師による学科講演会を２回実施し（「セクシュアルマイノリティへの心理理解」および「薬害エイズと心理的支援」）、多くの学生が参加した。 ②外部実習を伴う授業において一部トラブルがあり、指導の修正や実習マニュアルの改訂などを行い対処した。 （２）今後の課題 ①今年度も在学生対象の学科講演会を２回開催する。 ②外部実習授業では実習先の選定および担当者との連携方法など調整が必要である。
研究	（１）特筆すべき事項 ①当学科教員主催の学会を目白大学にて開催した（「日本犯罪心理学会」「日本理論心理学」）。 ②論文発表は活発に行われた（44 件）が、昨年度（57 件）より少なかった。 （２）今後の課題 ①論文発表をさらに増やすよう務める。 ②外部研究費はある程度獲得しているが、さらに補助金等を得て研究活動を活発に行う。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①就職率 80%を目標としたが実績は 73.6%であり目標にはやや足りなかった。 ②過年度生数の目標を 10 名以下としたが実績 23 名であり目標を達成できなかった。 （２）今後の課題 ①社会状況は厳しいが今年度も就職率 80%を目標とする。 ②過年度生数の今年度 23 名を来年は 20 名以下にする。 ③低学年より出席状況をクラス担任が十分把握し、出席状況の良くない学生に早めに指導するよう心がける。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①就職率 80%を目標としたが実績は 73.6%であり目標にはやや足りなかった。 ②過年度生数の目標を 10 名以下としたが実績 23 名であり目標を達成できなかった。 （２）今後の課題 ①社会状況は厳しいが今年度も就職率 80%を目標とする。 ②過年度生数の今年度 23 名を来年は 20 名以下にする。 ③低学年より出席状況をクラス担任が十分把握し、出席状況の良くない学生に早めに指導するよう心がける。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①学科保護者会などがないため桐光会役員推薦がうまくできなかった。 （２）今後の課題 ①心理臨床系教員は外来ケース担当や院生指導など負担が多いので、非臨床系教員との間で業務量の調整を図る。 ②現時点で学科保護者会の設立予定はないが今後の課題と考える。
その他	（１）特筆すべき事項 ①学科ＦＤとして外部講師を招き効果的なパワーポイント授業の教育講演を行い、多くの教員が参加した。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	人間福祉学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①教員の様々な努力や工夫により、私語のない授業の努力が行われた（例として、座席指定制、映像の活用、現場の実践者を呼ぶなどの具体的な工夫など）。 （２）今後の課題 ①旧カリキュラム制の大半が卒業し、福祉士制度の新カリキュラムの完成年度となり、今後の資格制度の運用をどのように進めていくかという大きな課題の検討が必要となっている。
研究	（１）特筆すべき事項 ①学科内では、科研費、大学特別研究など積極的な研究費の採択を目指したチャレンジを教員が進めており、その結果として、若手の教員を中心に採択も受けている。 （２）今後の課題 ①若手に教員には積極的に大学特別研究費の申請を行い、科研費の申請につながるよう学科会議でさらに強調していく。 ②地域との協同による教員間の専門性を発揮した共同研究を推し進めていきたい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①1年および２年次はキャリアデザインによる面接での個別学生の把握を進め、退学者の減少につながっている。 ②３年および４年は、ゼミや卒論ゼミという集団で個別的な学生の状況を把握している。 （２）今後の課題 ①３および４年次における学生指導の充実のため、教員間の情報交換や学科内 FD の検討を進めたい。 ②新カリキュラムの完成年度以降、これまでに比べ合格率の低下傾向に対して、国家試験について新たな指導方針と合格に向けた検討を進める必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①様々な形で所属教員が、国レベル、地方レベルを問わず各種委員会の主要な役割を果たしてきている。 ②ここの社会的貢献の細目には反映されていないが、各種研修事業や専門職養成に関連した講義や講演活動を積極的に行っている。 （２）今後の課題 ①学科として地方自治体との協力関係の形成とともに、関係学会との積極的な役割を教員が担うことも必要である。さらに、協同研究のできる体制を目指していきたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①学科会議開催前に５部門（FD、教務、入試広報、学生、キャリア）での打ち合わせを通して、会議の円滑な運営を行っている。 ②学科内では、学科会議だけではなく、実習委員会、相談演習委員会、就職委員会を個別に開催し、学内と学科全体との調整を進めた。 （２）今後の課題 ①学科として、一定のアイデンティティを共有できるような責任分担と役割の自覚を持てるような体制の確立を目指す。 ②学科創設 10 周年記念事業の実行委員会を創設し、学科内の活性化を図る。
その他	（１）特筆すべき事項 ①新カリキュラムの完成年度とその後に向けた「人材育成 PT」を設けて、資格取得だけではなく、学科に学んだ学生がどのように卒業していくかという問題と課題を学科会議に答申した。 （２）今後の課題 ①学科として、平成２５年度のカリキュラム改訂（大学の初年時教育との連携を踏まえながら）に向けた PT 会議を設置し、実際の具体的内容の検討を進める。 ②学科開設１０年目の記念事業を計画し､そのための実行委員会と各科教員全員が参加する行事を具体的に検討･決定していく。 ③新たな１０年目として、独自性を発揮できるような、新たな活動計画や事業計画を積極的に検討していく。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	子ども学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①24 年度からの新しいカリキュラムを検討した。 （２）今後の課題 ①24 年度からの新カリキュラムの実施にさきがけ、新カリキュラムによる学科のモットーを明確にするべきである。 ②新科目の内容充実と担当者の充当も課題である。
研究	（１）特筆すべき事項 ①学科内での特別研究費対象研究 （２）今後の課題 ①若手研究者による特別研究費対象の研究活動の奨励
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①保育士・幼児教育者の養成校であることから、常に学生指導はＴＰＯを基盤に実施している。 （２）今後の課題 ①学科所属の教員のＴＰＯに関する認識に差があることは今後の課題として残る。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①学科特別行事「まみむめ　めじろ　かきくけこども」 リカレント保育講座　春・秋　公開講座　以上年間４回の学科行事があり、いずれも社会貢献していると捉える。 （２）今後の課題 ①子ども学科独自の社会貢献を考えることが必要であり、各行事のあり方を検討する必要があると考える。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①子ども学科　学科会議のあり方・・・・月１回の学科会議を定例化して、全教員が参加できるよう配慮したい。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	児童教育学科

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①教育における現場性と身体性を重視し、各種教育施設訪問、グループ研究、フィールドワークなどの多様な学習活動を展開してきた。 ②児童教育に関わる専門家の育成を指向する学科として、児童理解、各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習・特別活動などについて、それぞれの目的と特性に応じ、実践力の向上を目指した教育を展開してきた。 ③対話力の重要性を共通認識し、対話型授業を各教科の指導において意図的に展開してきた。 ④児童教育の専門家として重要な創造性や感性を高める教育として、体育、美術・音楽教育に取り組んできた。 （２）今後の課題 ①完成年度をむかえ、就職試験への対応が開始される。教職希望者への受験対策、教職外の進路希望者への基礎的学力の向上など、学生に進路に対応した教育の推進の具体策を検討し、実施していく。 ②教師養成塾、教員採用研修などの最近の各都道府県の施策に対応した学内・学科内対応策を具体化していく。
研究	（１）特筆すべき事項 ①科学研究費研究　２　　本学特別研究費研究　５　を受給することができた。 ②学会誌掲載論文　１　　本学紀要掲載論文　６　　学会発表　４　が掲載できた。 （２）今後の課題 ①科学研究費への応募、本学特別研究費の応募数の増加を目指す。 ②学会誌、本学紀要へのできるだけ多数の掲載を目指し、その過程で所属教員の研究者としての力量の向上を希求する。 ③教員養成、教育制度、学習方法など、児童教育学科ならではの研究について学科所属教員による共同研究を推進する。 ④学科構成員の研究・実践を共有するための学内ＦＤを推進していく。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①一人一人の学生の学習・生活状況の把握に努めてきた。このためクラス担任、ゼミ担任による個別面談を実施してきた。また学科会では、学生に関する話し合いの時間を設定し、個々の学生について学科の教職員が共通理解し、また問題に協力して対応する体制をつくってきた。 ②学生の社会参加能力を高めるため、ボランティア活動を奨励し、学科組織に担当者を置き、紹介・活動の実施・事後の成果の集約が円滑にできるようにしてきた。 （２）今後の課題 ①現代の学生は、人間関係に苦手意識をもち、刹那的傾向があり、興味・関心も多彩である。こうした多様な学生たちに社会規律・授業規律を定着させるとともに、そのよさを引出し、児童教育の専門家として、人間的基盤を広げるための具体的手立ての検討と実施が課題である。 ②非常勤講師の先生方とも共通認識を深め、協同して学生指導を進めていく。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①各教職員の特性を生かし、地域・社会に貢献する活動を行ってきた。文科省・国立教育政策研究所関連審議会委員、都県教育研修センター講師、区外部評価委員、市民講座講師等を担ってきた。 （２）今後の課題 ①学科所属教職員の社会貢献活動を、本学の教育、殊に児童教育学科の学生の指導に資するための方策を検討する。 ②各教職員が社会講演活動により得た成果を学科全体で共有する機会を設定する。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①学務運営委員会、教務、入試広報、学生、キャリア　図書の委員会の内容について学科会で必ず報告し合うようにした。また学科としての要望事項については、事前調整を行なってきた。資格支援センターとの免許更新制度、実習関係の連絡・調整に努めてきた。 （２）今後の課題 ①学科の教育活動や業務について全教職員が認識し、共通意識をもって推進していく体制づくりをいっそう進めていく。
その他	（１）特筆すべき事項 ①区教育委員会との提携により観察実習を推進してきた。 ②学科新聞を継続的に刊行し、50 号を数えた。 ③教育現場の実践者を招聘し、学生の啓発に生かしてきた。 （２）今後の課題 ①平成 25 年度の児童学科カリキュラムの改訂に向けての試案作りをすすめていく。 ②各都道府県の教員採用の現状をできる限り正確に把握していく。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	社会学部

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

＜教育・研究＞

①カリキュラムの見直しと改善が 3 学科で行われた。社会情報学科では 1 年次の専門科目の充実、メディア表現学科では平成 25 年度に向けた新カリキュラムの編成、地域社会学科ではフィールドワークの充実と社会人講師による授業展開などがなされた。

②ゼミ活動に関して、学外研修が活発に行われるようになった。

③科学研究費、学内特別研究費、学外の補助金・助成金を獲得した研究が増加している。それにともなって、論文数と学会発表件数も増加している。特に、地域社会学科では学外研究費等の獲得に多大な成果を上げている。

＜学生指導＞

①履修単位数の確認を学年ごとに行い、当該学年で履修単位数が標準以下の学生に対しては本人及び保護者とその旨の連絡を取り、4 年間での卒業が可能な学習及び履修指導を行った。特に、成績及び授業出席に問題のある学生の保護者にゼミ担当教員のコメントを郵送することで教員と保護者とのコミュニケーションが起こり、学生指導に効果がみられた。

②就職活動に関して、内定率の向上を目指した各学科での取り組みが精力的に行われ改善がみられた。特に、社会情報学科ではキャリアカウンセラーの積極的な活用とゼミ担当教員の個別面接、毎週求人リストを配布するなどの取り組みにより学内トップクラスの内定率が得られた。

③諸資格の取得の奨励（社会情報学科）やインターンシップ研修・ボランティア活動・イベントへの参加の促進（地域社会学科）などにより、より積極的で、活動的な学生の育成がなされた。

＜社会貢献＞

①各教員の特性を生かした講演やマスコミ活動などが行われた。

②特に、メディア表現学科では TV 番組制作などを通した情報発信が、また、地域社会学科では地域連携の活動が活発に行われた。

＜組織マネジメント＞

①学科運営に関して、各学科長の努力により改善された。特に、メディア表現学科では学科会議の進め方に工夫がなされ、全教員が積極的に参加できる効率的で実利的な話し合いの場が持たれた。

②ホームページを作成（社会情報学科）したり、年報を発刊（地域社会学科）したりして、学科での取り組みと成果を広報した。

③緊急災害時の学生安否確認システム（地域社会学科）を構築するなどの対策がなされた。

（２）今後の課題

＜教育・研究＞

①3 学科ともにカリキュラム編成と授業内容の充実に苦心しているが、その成果・手応えは今後の検討すべき課題である。また、卒業研究・卒業論文については、その位置づけの再検討と学生の動機づけを高める指導方法についての工夫が必要である。

②研究活動のための環境整備(研究に費やす時間、経費など)が必要であるが、学科によって、あるいは個々の教員によって研究活動への取り組みに差異があり、各教員が研究と教育との連携の重要性を認識することも大きな課題である。

＜学生指導＞

①履修単位数が極端に少ない学生や授業出席回数が不良な学生に対しては、ゼミ担当教員と保護者との間でこの旨の情報を共有する必要がある。4 年間での卒業を目標にした学生指導を両者が一体になって促進できるようなシステム作りが必要である。

②就活指導に関しては 3 学科での取り組みに温度差がみられる。キャリアカウンセラーの活用、求人情報の伝達などを学生の自主性に任せるのではなく、特に、自主性のない学生に対しては学科からの積極的な働きかけが必要である。例えば、社会情報学科では、ゼミ単位でキャリアカウンセラーとの面談時間を設定したり、毎週の求人情報を印刷物及びネット情報として提供しているが、この様な個々の学生との個別な対応を奨励したい。

③学生生活や学習上の問題、就活の指導など、ゼミ教員による個々の学生との面談を定期的に行い、退学、休学、学業不振などの問題が起こらないような未然の対策が必要である。

＜社会貢献＞

①各教員の活動はなされているが、学科単位あるいは学部単位での総合的な社会貢献はなされていない。特に、3 学科の特性を生かした地域連携を意図した社会貢献の可能性を検討する必要がある。

＜組織マネジメント＞

①従来、学科運営に関しては各学科の特性に応じて行われているが、3 学科共通の問題点や情報を共有することにより、学科運営の円滑化を図る必要がある。

②各学科での行事や成果などについての情報公開の場を共有する必要がある。そのことにより、3 学科の競争的かかわりが促進されると考えられる。

＜社会学部のあり方＞

①社会学部の 3 学科はそれぞれの個性を生かした教育・研究が精力的に行われているが、学科間の差異はあるものの受験志願者の減少傾向が続いている。対外的に、特に受験生に向けて社会学部としての各学科の特性をアピールする方法を模索する必要がある。

②3 学科の連携は共通科目の設置などによって工夫されているが、3 学科の競争的な関わりを促す必要がある。例えば、代表者による 3 学科合同の卒業研究発表会、教員相互の研究会・共同研究、各科専門科目開放と卒業に必要な履修科目数への算入、学生間の交流など、学部内での研究及び教育の連携を目指したい。

③3 学科の各教員の資源を統合して、社会学部としての社会貢献の在り方を模索したい。

④学部長と 3 学科長の定期的な会議を開催（平成 24 年度より月例で実施中）し、学部及び学科の諸問題を解決する。

⑤「三本の矢の教え」を肝に銘じ、3 学科を束ねたより力強い社会学部を創生したい。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	社会情報学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①基幹科目・1年次生向けの専門科目を充実させた。 ②各ゼミの特質を「社会情報学」の中に的確に位置付けるよう努力した。 ③短大生活科学科との連携を実現した。 ④「卒業研究」の形式の改善により、「質」が向上した。 ⑤臨地研修におけるテーマの見直しを図り、厳密なレポートを書かせた。 ⑥学外研修を取り入れるゼミが多く見受けられるようになり、ゼミ活動が活性化した。 （２）今後の課題 ①社会情報学科「学びのフレームワーク」を作成し、系統だったカリキュラムの見直しを検討する。 ②ゼミ生の「卒業研究」に対する意識を高める。
研究	（１）特筆すべき事項 ①教員スタッフの研究成果が上がった。論文数は23、単著図書の刊行は3、学会発表件数は12であった。 ②科研費の給付を受けているものは2件、申請したものは4件、新たに採択されたものは1件、共同研究費をうけているものは3件、学内特別研究費を受けたものは2件であった。 ③学科誌「ソシオ情報シリーズ」第10号「風評被害の深層」を刊行し、8名の学科教員が寄稿した。 ④社会調査や社会問題の分析と提言、また文献資料の解読や情報機器を使って現地調査に取り組む教員が多く見られた。 ・桐和祭シンポジウム「大震災と社会情報、地域メディア～そのとき地域のメディアはどう動いたのか」主催 ・「被災地街づくりコンテスト」参加 ・奥日光の定期観測 （２）今後の課題 ①教員にとっての十分な研究活動（学会参加・論文作成など）の実現を目指したい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①クラス担任は学部長・学科長以外のすべての教員が受け持ち、成績・出席不良学生に対して不断に働きかけた。 ②成績・出席不良学生にはクラス・ゼミ担任のコメント付き成績表を送付した。 ③就活支援として、面接訓練を行い、就活相談会を週 1 回実施し、「内定がとれそうなオススメ求人リスト」を週 1 回発行した。 ④諸資格取得希望者への受験指導と集中講座を実施し、秘書検定2級60名、3級17名、販売士2級4名、フードスペシャリスト検定6名合格した。 ⑤各学年のオリエンテーション内容を分りやすくした。 （２）今後の課題 ①不明学生を皆無にする。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①講演・マスコミ取材等に応ずる教員が多く見られた。 ②学科で義捐金を募り、製菓学科とのコラボレーションによる焼き菓子を加須市にある避難施設に届けた。 （２）今後の課題 ①社会に提言していく場として、「社会問題研究所」（仮称）の設立構想に着手したが、これを実現の方向に進めたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①企業とのコラボレーション授業により、企業との連携を深めるとともに、授業内容を学科ホームページで紹介した。 ②フォローアップセミナーの内容を強化した。 ③FD活動は、「授業内容向上のための報告会」が一通り終了した。 ④学科内の共通認識を得るために、「ソシオシリーズ」刊行を続行した。 （２）今後の課題 ①短大生活科学科との連携をさらに模索する。 ②業務分担が偏らないように注意する。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①学生の在籍数増加に対して、専任教員数が不足している。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	メディア表現学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①メディア系の若手新任教員確保のため、学科内に選考委員会を設け、よりよい人材の確保に努めた。 ②近年の志願者減に対応すべく、従来のシラバス、カリキュラム編成を全面的に見直すための学科内ワーキング・グループを結成した。昨年５月～今年３月まで、ほぼ毎週、同グループの５人の教員、学科長、２人のオブザーヴァーが参加するミーティングを重ね、現行カリキュラムの問題点を抽出し、平成 25 年度実施に向けて新カリキュラム編成案を完成させた。この案を学事運営委員会にかけるにあたっては、事前に、佐藤学長、岩崎副学長に内容報告をし、しかるべき示唆を受け、新編成案の最終調整に役立てた。 本年３月の学事運営委員会で承認を受け、現在、教授会に上程する時期を見計らっている。 （２）今後の課題 ①新カリキュラムの目玉としている科目間連携をいかに効果的に進めるか、継続審議の必要がある。 ②授業の一部をご担当いただいている非常勤講師との懇談会を開催し、よりよい意思の疎通を図る必要を痛感する。
研究	（１）特筆すべき事項 ①旺盛な研究活動・発信活動に邁進する教員がいる一方で、昨年度の学術的業績がまったくない教員が現学科構成員の半数近くにに及んだ。 ②当該の教員には、研究者としての自覚を持ち、教育活動と同時に、研究・執筆・発信活動に力を入れるよう、学科長として振り返り面談の折に注意を促した。 （２）今後の課題 ①研究活動の質と量において教員間のアンバランスをなくし、教育集団であると同時に、良質の研究者集団となるべく、随時、学科長として各教員に自覚を促していきたい。 ②特に実務家教員に、大学に教員として職を得た以上、教育活動と併せて研究活動を行うよう、自覚を促したい。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①内定率低迷を受けて、特にキャリア委員（鷲谷准教授）の懇切な指導が目立った。 ②実効ある３，４年生の指導を目指して、ゼミ人数の上限を設け、巨大ゼミの解消に努めた。 ③毎回の学科会冒頭で、登校低迷学生の把握に努め（キャリア・デザイン、ゼミの出席動向を指標とした）、問題があると認めた場合は、学生本人、場合によっては保護者に連絡を取り、登校・授業出席を促す指導体制を整えた。 （２）今後の課題 ①休学・退学学生を減らすための学科内体制を一段と強化する必要がある。 ②就職内定率が上がっていない。学生のニーズと、社会が求める人材との間のギャップを埋め、学生の卒業後のキャリア形成を支援する体制を整える必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①前ページの社会貢献活動欄に記したとおり、各教員に旺盛な活動実績があった。 ②本学科（斉藤教授指導）が、めじてれびとして東京ケーブルビジョンに提供している番組で、地域と震災の問題を取り上げ、タイムリーな企画として歓迎された。 ③当学科学生（河合教授のゼミ生）が制作した AC 広告がテレビ放映され、大きく社会に貢献している（現在も放映中）。 （２）今後の課題 ①各先生の社会貢献活動が学科にフィードバックされ、その内容が学科の共有財産となり、教育・研究に生かせる体制づくりをしたい。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①毎月の学科会を、ルーチン・ワークとなる部分と、問題提起・解決の部分にわけ、議論の効率化を図った。 ②後者の部分については、毎月のテーマを決め、事前に担当教員を指名し、問題の所在・解決の方策についてプレゼンをする体制を整えた。 ③年度初めに決定している学校行事については出席が原則であることを確認し、万やむを得ない場合は、休暇届を出すよう注意を促した。 ④目白大学新聞制作に、広く学内から人材・企画を求められるような体制をつくった。 （２）今後の課題 ①学科内で常時検討が必要な事項を洗い出し、小ワーキング・グループで適宜議論をする体制をつくりたい。 ②学科長に集中している校務を適宜学科構成員で分担し、学科への責任感を高めたい。 ③学科ＨＰを開設し、学科の学術力・教育力のＰＲに努め、志願者の像に結び付けたい。
その他	（１）特筆すべき事項 ①インターンシップ感謝の会を例年通り開催し、入試広報・キャリア・センターの方ともども学生受け入れ先企業・団体との親交をはかった。 （２）今後の課題 ①現在の週４日出講体制は、研究のための調査時間・範囲を著しく狭めている。学科のみならず学内の学術力の強化・向上のために、出講日を旧（週３日出講体制）に復する議論が必要と考える。 ②本シートでは論文の本数は問われるが、著書（学術書・一般書）や作品について記述する欄がない。教員の業績の正確な把握のために本シート形式の再検討をお願いしたい。 ③同じ学部内にある３学科間での連携を深め、情報を交換・共有し、共存共栄体制をとりながら志願者の確保に努めたい。 ④特任制度が明文化されたが、現特任教員について、専任から特任への職位変更事由がいまも継続しているか、再確認の必要はないか。特任である事由が不明の先生が、定年まで在職すると、他の教員の校務負担に少なからず長期的な影響が出ることを考慮願いたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	地域社会学科

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①本学科の教育理念の柱であるフィールドワーク（現地調査・臨地研修）に、教員各自がプロジェクトリーダーとして労力と時間をかけて取り組んだ。 ②社会問題を多く取り上げ、社会人を講師として積極的に招くなど、社会との接点を意識した授業を展開し、学生の社会意識を喚起することに努めた。 ③ほとんどの教員がレジュメやパワーポイント、ビデオを使ったり、課題やリアクションペーパーを用いたりして、学生の関心度や理解度を高めたりチェックしたりしている。 （２）今後の課題 ①教職課程を希望しながら単位不足で教職実習に参加できない学生が多数出たので、よりていねいな履修指導とサポートを心がけたい。 ②卒業論文の中間報告会は学科のイベントとして定着したが、最終報告会については意見が是非に分かれ、バラバラに実施されている。 ③成績評価をめぐって地域社会学科は社会学部の中でも特に「辛い」ようであるが、学科内で「甘く」しようという意見は出ていない。
研究	（１）特筆すべき事項 ①科学研究費補助金が６件、自治体・協議会からの補助金・助成金が２件、目白大学特別研究費補助金が１件、それぞれ採択された。 ②昨年度・今年度に採用した若手教員が、校務をこなす中で、論文執筆・学会発表・研究費獲得の点で活躍してくれたことは大きい。 ③業績発表には至らなくとも、現地調査、資料収集、史料読解、学会出席など、個々に成果は見られたようである。 （２）今後の課題 ①学生指導や事務対応に費やされる時間が多く、夏休みや春休みの長期休暇も短くなる一方で、研究に充てられる時間が年々削られていくことへの苛立ちも大きい。 ②今年度は平均１～２本の論文発表にとどまり、昨年度よりも業績が少なかったようであり、研究活動のための環境整備が必要である。 ③社会学部３学科の研究面での連携をめざし、共同研究の場としてすでに構想中と言われる社会問題研究所（仮称）の設立が急がれる。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①地域社会学科の開設から６年、退学者や除籍者も少なくなかったが、最後の１期生を卒業生として送り出した。 ②進路指導委員を中心とする指導が功を奏し、学科の就職内定率が 85.1％と、大学全体の就職内定率を上回った。 ③自治体やホテルでのインターンシップ研修を指導し、地域でのボランティア活動やイベントへの参加を促した。 （２）今後の課題 ①昨年度は劇的に改善したと思われた学科の学位授与者率が、今年度は再び大学全体を下回り 72.9％と低迷した。 ②学生のキャリア意識や就職意欲をもっと高め、今後は就職希望者数自体をさらに増加させることが課題である。 ③成績不振学生の保護者には成績表に手紙を付して状況を伝えているが、問題学生に対しては今後も早めの対応を心がけたい。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①公開講座「第４回地域フォーラム」を開催し、新宿区長、りそな銀行ＣＣ部長をパネリストとして招き、地域住民との対話の機会を設けた。 ②戸田市役所の寄附講座「地域政策の開発」を実施するとともに、同所と連携して同市のまちづくりに関する共同研究を行った。 ③イベント「染めの小道」に学科として参画・参加し、地域社会学科学生を３日間で約 60 人動員して、地元中井・落合地区への社会貢献活動を行った。 ④中井・落合、新宿区はもちろん、練馬区、品川区、中央区、さいたま市、長野市、大阪市など、各地で教員が専門性を活かし地域連携による社会貢献に取り組んでいる。 （２）今後の課題 ①学科の特性を活かし、今後は他の自治体、企業やＮＰＯなどとのコラボレーションも積極的に探っていきたい。 ②地域連携・社会貢献は、各学科が実践・模索していると思われるので、地域連携・社会貢献センターのような全学的な組織を立ち上げて情報を一元化することが急務である。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①本学科のゼミ活動、フィールドワーク、学生の成果などの記録を中心にまとめた『地域社会学科年報』第３号を刊行した。 ②桐和祭運営委員２名を選出し、地域社会学科「保護者会」を２回（７月と１月）開催し、全体説明と個別相談を実施した。 ③東日本大震災後、ただちに学生連絡先票とメーリングリストによる緊急災害時の学生安否確認システムを立ち上げた。 ④震災のため中止となったフレッシュマンセミナーの代わりに、富士五湖周辺で地域社会学科のみのスタディツアーを催行した。 （２）今後の課題 ①学生募集状況は年々改善されてきているものの、学科の特色をより鮮明に打ち出すことで、学生のさらなる安定的確保を目指したい。 ②問題学生の対応、就活支援の強化、地域連携の拡大、学科の情報発信など、今後もさらに努力を続けていきたい。
その他	（１）特筆すべき事項 ①本学科のポリシーである「現場主義」が、教育活動・ゼミ運営・学生指導・進路指導など、様々な局面において開花しつつある。 ②専門分野に相当な業績をもつ教員スタッフが、学科のポリシーの実現に尽力している点は、大いに評価できると思われる。 ③今年度から学科の研究室・事務室が本館から新３号館に移転し、学科開設６年目で新たなスタートを切った。 ④新３号館１階の環境は非常に悪く、北向き・半地下で湿気が多くカビが発生し、８月には集中豪雨のため４室が浸水した。 （２）今後の課題 ①新３号館に移転して研究室の環境が悪化し、体調不良・持病悪化を訴える教員が数名おり、管理部になにかと善処していただいたが、高温多湿になりやすく依然問題が多い。 ②研究室移転、震災の影響、節電の影響、豪雨被害など、「その他」的な対応が迫られた１年だった。今後の教訓として活かしたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	経営学部

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

＜教育＞

①経営学はもともと実践科学ではあり、本学部では実践教育を十分に展開しています。

②実践教育に偏らず、問題回化何時能力を開発するために、文系学部では珍しいですが、卒業研究を必修科目として４年間に多様な個別知識を研究テーマに総動員することのできる総合能力や知識の組み立て能力を涵養している。この意味で卒業研究は、経営学部における教育の原点であり、学生を訓練した結果としての集大成として評価される。

③大学間のインターゼミナールや大学内のインナーゼミナールを重視し、幅広い研究交流を企画し、他大学でも通用する人材の育成努めている。

＜研究＞

①多くの教員が学会において役員として研究活動に貢献している。

②卒業論文の作成を通じた研究と教育に教員一同が多大な努力を払っている。しかしながら特別研究費や科学研究費の採択や応募者が少なく、研究成果の向上に向けたさらなる努力を必要とする。

＜学生指導＞

①新入生に対する導入教育の一環としてクラス担任の他に相談員制度を導入し、学生個々人に対する木目細かな指導体制を組み入れている。

②4 年間の修学段階における学生のニーズに応えるために公開講演会、SPI 対策講座、資格取得の支援、就活の支援などの学生支援を学部学科単位でも随時行い補完している。

＜社会貢献＞

①神楽坂まつり実行委員会に学生が主体的に参画し、神楽坂通り商店会と共同で地域づくり・まちづくりに貢献した。

＜組織マネジメント＞

②学科会議の役割が明確ではなく、特に人事関係事項では人事ルールが明確ではなく、手続き上の混乱が見られた。しかし、この手続き問題はもちろん大学にはなく、本学部学科固有性に起因している。

（２）今後の課題

①学部学科の運営ルールを明確にし、学生のために学部学科の発展に努力を傾注すべきである。

②入口・中身・出口を一体として問題点を把握して総合的に学部学科を計画的に改善していく。アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、およびディプロマ・ポリシーを本学部学科に適合するように深化し活性化して、総合的に具現化する必要がある。長中期の計画策定が急務であると思われる。

③中長期計画では、外部の受験者、高校生、父母、進路担当高校教員などに対するメッセージの発信が極めて重要であると考えている。経営学部の内実を的確に表現するキャッチ・フレーズやキーワードが重要な役割を果たす。例えば、学習や学習の成果を示すある種の目標として開発するためのキャッチとして「システムデザイン」能力の開発に求めるなどを考えている。

④本学は、進路指導にかなり力を入れ、大切なキャリアデザインの教育体系を作り上げているが、しかしまだ学生の成長段階のニーズに対応して必ずしも十分に整備されていないかもしれない。もちろんこの木目細かな進路指導は、個々の学生をよく知っている担当教員が負担し生きたものになるであろう。

⑤多様な学生の出口に応じた履修モデルを平易なメニューとして提供できるカリキュラム上の工夫が重要である。

⑥入口においては、本学にとって必要な特徴ある知識や能力をもった入学生をいかに増加させていくかを検討する必要がある。

⑦入口・中身・出口の一体改革は、ある種のメッセージ性をもって大学の体質を改善する長中期的な努力の中で実現可能であると思われる。

⑧大学は研究と教育の場であり、研究に裏付けされた教育実践が重要であり、その枠組みのもとで FD や学生による評価などを位置付ける必要がある。特に大学の基礎にアメリカでいうリサーチ・セミナーを形成する研究機会を提供すべきである。

⑨以上の改革の中で初年度教育、特にベーシックセミナーのあり方や実践は、今後の大学の命運を左右するほど重要であると位置付けている。

⑩学部創設 10 周年記念セミナーの開催を計画している。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	経営学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①卒業論文の必修科目化が定着してきており、４年生は４年間に修得した多様な個別知識を総動員して、学生の問題意識に応じた研究テーマに意欲的に取り組んでいる。卒業研究は、経営学部における教育の原点であると評価される。 ②第３回公開ゼミナール研究発表大会が実施された。個々のゼミナールの狭い範囲の活動には限界があり、ゼミナール相互間の研究交流と相互効果 が促進され、学士課程において高い意義が認められる。 ③マーケティング・コース所属のゼミナールにおいて企業や江戸川大学と共同でプレゼンテーション大会を企画し実施し、他大学との研究交流が促進されている。 （２）今後の課題 ①学生の進路に適合した履修モデルを考え明示し、学生の参考に資する必要がある。 ②学生のニーズに応じたカリキュラムの再検討が必要である。 ③初年度教育、特にベーシック・セミナーとの関連でカリキュラム全体の見直しをする必要がある。
研究	（１）特筆すべき事項 ①多くの先生が学会において役員として研究活動に貢献している。 ②卒業論文の作成を通じた研究と教育に教員一同が多大な努力を払っている。ただし特別研究費や科学研究費の採択が少なく、さらなる努力を必要とする。 （２）今後の課題 ①公的資金の獲得に向けてさらなる努力が必要である。 ②教員相互間の切磋琢磨の中で教員の研究力を向上させる試みが必要である。大学において研究が教育の根幹に位置づけられるようにしなければならない。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①新入生に対する導入教育の一環としてクラス担任の他に相談員制度を導入し、学生個々人に対するきめ細かな指導体制を組み込んでいる。 ②4 年間の修学段階における学生のニーズに応えるために公開講演会、SPI 対策講座、資格取得の支援、就活の支援を随時行っている。 （２）今後の課題 ①新しい体制でのフレッシュマンセミナーを成功裏に導くように周到な準備と新しいビジョンが必要である。 ②学生指導の体制は十分に整っているが、さらに新しい学生問題が発生する可能性があるので、それに迅速な対応を可能にするシステムづくりが重要である。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①第 40 回神楽坂まつり実行委員会に学生が主体的に参画し、神楽坂通り商店会と共同で地域づくり・まちづくりに貢献した。 （２）今後の課題
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①学科会議の役割が明確ではなく、手続き上の混乱が見られた。しかし、この手続き問題はもちろん大学にはなく、この手続き問題はもちろん大学ではなく、本学部学科固有の原因に起因する。 ②人事に関するルール化が緊急で重要な課題である。 （２）今後の課題 ①民主的かつ透明な学科運営を目指し、無用な混乱を回避するようにする。 ②学科では重要な審議事項については、十分に時間を掛けて議論を尽くすようにする。
その他	（１）特筆すべき事項 ①在学生と卒業生の交流の場として「OB・OG 懇親会」を開催した。 （２）今後の課題

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	外国語学部

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

＜教育＞

本学部の特筆すべき教育活動事例として、①交換留学制度に基づく学生の海外派遣（韓国語学科）、②１学期間のセメスター留学（Power English）の実施（英米語学科）、③日本語・日本語教育学科独自の海外日本語教育インターンシップ制度に基づく学生（２名）の海外派遣、④台湾庚寧大学での日本語教育実習の実施（日本語・日本語教育学科）、⑤平成２４年度刊行予定の教科書の学科教員による共同執筆（韓国語学科）、などが挙げられる。

＜研究＞

本学部の特筆すべき研究活動事例として、①日本韓国語教育学会の本学での開催、②中国語教育学会との共催による本学での研究発表会の開催、③*Lingua* や *Journal of Psycholinguistic Research* 等の一流国際誌の論文査読委員としての活動（英米語学科）、などが挙げられる。

＜学生指導＞

本学部の特筆すべき学生指導の活動事例として、①きめ細かい指導の実施（例えば、韓国語学科では学生を 12 名程度のグループに分け、学業や生活面での個別指導を実施、英米語学科でもクラス担任教員、ゼミ担当教員、コア・プログラム担当教員によるきめ細かい指導を実施）、②中国語弁論大会での一位を含む複数の入賞者の輩出、などが挙げられる。

＜社会貢献＞

本学部の特筆すべき社会貢献活動の事例として、①教員免許更新制度に基づく講習の実施（韓国語学科）、②日本在住の外国人の子弟を対象とする日本語学習支援、③日本青少年文化センター評議委員としての活動（英米語学科）、④実用英語技能検定試験委員としての活動（英米語学科）、などが挙げられる。

＜組織マネジメント＞

本学部の組織マネジメントに関わる特筆すべき活動事例として、中国語学科における山西大学商務学院との協定締結が挙げられる。

（２）今後の課題

＜教育＞

本学部の教育に関わる課題として、①学位授与の方針の更なる明確化と、順次性のある体系的なカリキュラムの構築、②中国語検定試験合格者数増加の方策の検討、③少人数教育実施の方策の検討と、就職率向上のための進路指導の強化（韓国語学科）、④国内外での日本語教育実習の機会の拡充、などが挙げられる。

＜研究＞

本学部の研究に関わる課題として、①科学研究費補助金への申請率の向上を図るための方策の検討、②全国レベルの学会誌や国際誌への投稿数（掲載数）を増やす努力、③授業数や業務負担の増加による研究時間の削減という現状の改善（特に韓国語学科）、④中国語学科独自の教材の編纂、などが挙げられる。

＜学生指導＞

本学部の学生指導に関わる課題として、①学科長・クラス担任教員・ゼミ担当教員等の緊密な連携による組織的な指導体制の確立（英米語学科）、②就職支援体制の確立、③海外派遣学生数を増やす努力（中国語学科）、などが挙げられる。

＜社会貢献＞

本学部の社会貢献に関わる課題として、①教育研究の成果を高大連携事業等を通して社会に還元していく努力、②休日出勤の増加に伴う負担軽減の方策の検討（日本語・日本語教育学科）、などが挙げられる。

＜組織マネジメント＞

本学部の組織マネジメントに関わる課題として、①透明で公正な学科の運営（英米語学科）、②学生定員充足のための方策の検討(中国語学科）、③有期教員の再雇用の際の無期への変更を含む雇用形態の改善（中国語学科）、④研究時間の確保（特に韓国語学科）、などが挙げられる。

＜その他＞

本学部のその他の課題として、教員側の都合を重視した教育ではなく、学生側の立場に立った教育を行っていくようなお一層努力する必要があることが挙げられるであろう。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	英米語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①１学期間のセメスター留学（Power English）による実践的語学教育を実施している。 ②多くの外国人教員を活用した発信型コミュニケーション能力の育成に注力している。 ③1・2年次生を対象とするコア・プログラムの実施により、英語の４技能のさらなる伸長を図るようにしている。 ④４年次の卒業研究を実り多いものとするために、少人数のゼミ指導の徹底を図っている。 （２）今後の課題 ①学位授与の方針（育成すべき人材像、獲得すべき知識・能力等の付加価値、達成すべき教育目標など）を明確化する必要がある。 ②順次性のある体系的なカリキュラムを構築していく必要がある。 ③カリキュラム編成のプロセスを透明化し民主化する必要がある。 ④研究業績と科目担当のミスマッチを解消する必要がある。
研究	（１）特筆すべき事項 ①*Lingua* や *Journal of Psycholinguistic Research* 等の一流の国際的学術誌の論文査読委員を務めた教員がいる。 （２）今後の課題 ①科学研究費補助金への申請率を上げる必要がある。 ②全国レベルの学会誌等への投稿数（掲載数）を増やす必要がある。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①クラス担任制度、ゼミ指導、コア・プログラム等を通じてきめ細かい指導を実施している。 （２）今後の課題 ①学科長、クラス担任教員、ゼミ指導教員等の緊密な連携による組織的な指導体制を確立する必要がある。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①日本青少年文化センター評議委員、社会福祉法人・河田母子厚生会監事、実用英語技能検定試験委員等を務めた教員がいる。 （２）今後の課題 ①教育研究の成果を、例えば高大連携事業等を通して、社会に還元していく努力をもっと積極的に行っていく必要がある。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 特になし。 （２）今後の課題 ①透明で公正な学科の運営を心掛けていく必要がある。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし。 （２）今後の課題 ①教員側の都合を重視した教育ではなく、学生側の要望や実態に適切に配慮した教育を行っていくように努力する必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	中国語学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①中国語検定試験での合格者数の増加
研究	（１）特筆すべき事項 ①「中国語教育学会」との共催で研究発表会を開催。学科所属の教員２名が研究発表。 ②黄丹青講師による天野郁夫東京大学名誉教授の著作『大学の誕生』の中国語版出版（南京大学出版社、共訳）。 （２）今後の課題 ①専攻語学としての本学科の中国語独自教材の編纂。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①二つの中国語弁論大会へ学生を参加させ、そのうちの一つで一位を含む複数の入賞者を出す。 （２）今後の課題 ①留学を含め、学生の海外派遣を増やす。 ②就職率向上のための指導の強化。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 特になし
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①山西大学商務学院との協定締結 （２）今後の課題 ①学生の定員充足。 ②学科所属教員の雇用形態の改善を図りたい。（再雇用に際して、「有期」→「無期」）
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	韓国語学科

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	（1）特筆すべき事項 ①1 年生の基礎韓国語の能力を向上させるために初年次教育の強化の一環としてより効果的な教育が実施できるように教材作成や教育方法などを改善するように努力した。24 年度に学科教員が共同執筆した教科書が刊行予定である。 ②海外に交換留学している交換留学生や D.D 生の指導のために遠隔指導を行った。 ③学生のキャリア教育や進路指導のためにプログラムを計画し、徹底的に指導した結果就職率が前年より上がった。 （2）今後の課題 ①学生数が大幅に増えているのに、クラス編成や「韓国語」の教育を忠実するためには少人数制教育へのさらなる工夫が必要と感じている。 ②就職率を上げるために進路指導を強化する必要があると思われる。
研究	（1）特筆すべき事項 ①「日本韓国語教育学会」を本校で開催した。日本で活躍している多くの韓国語研究者達を呼び、これからの韓国語教育のあり方について議論した。大学院生や卒業生に作り、学科の教員が積極的に参加している。 ②専攻としての「韓国語」の教育を特化するために教材を制作し、刊行予定である。 （2）今後の課題 ①学生の数が増えているのに、去年の同じく学科の教員の数が少ないので、受け持っている授業の数や雑務が多すぎるので研究に専念することすらできない状況である。改善する余地があると思う。
学生指導	（1）特筆すべき事項 ①1 年の担任のみではなく、指導教授システムを取り入れ、学生を 12 名程度に分け、個別に学業や生活相談などを通じきめ細かい指導を行っていた。 ②2 年次生はほぼ全員留学中であるが、キャリアデザイン等の授業を遠隔で行う。そのほか、担任と協定校担当の教員が頻繁に連絡を取り合い、学習や生活指導を行っていた。 ③3 年次生と 4 年次生には、就職について積極的な姿勢を持つように、学科全体あるいはゼミを通して徹底した進路指導を行っている。行っていた。 （2）今後の課題 ①様々な面において、学生と身近に接触し、きめ細かい指導をするためにシステムを作る必要があると思われる。
社会貢献	（1）特筆すべき事項 ①例年と同じく、教員免許更新制度の講習を担当し、小・中・高の教員に韓国語及び韓国文化を広めると同時に目白大学の韓国語学科の存在もアピールした。 ②学園祭に参加し、教員の指導のもとで学生と一緒に韓国の食文化を地域住民に伝えようとしていた。 （2）今後の課題 ①社会貢献のために積極的に動く必要があると思われる。学科の方針では高校出張授業などを積極的に受けるようにしている。
組織マネジメント	（1）特筆すべき事項 ①教育や学生指導の部分においては、教員が率先して動いている。学科運営に大きな問題はないと認識している。 しかし、研究の実績がたりないのは認めざるを得ない。両立できるような環境作りに努めなければならないと思う。 （2）今後の課題 ②教員の人数が少ないので雑務や学生指導に追われ、研究に取り組む時間がないので問題面があり、不満もある。改善すべきと思う。
その他	（1）特筆すべき事項 特になし （2）今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 (評価単位名称)	日本語・日本語教育学科

項目	自己評価 ※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①日本語・日本語教育学科独自の制度、海外日本語教育インターンシップ制度に基づき、本年度は２名のインターン生を派遣することができた。 ②留学生の多い日本学科でもあるので、ゼミ生を中心に日本文化体験の機会として、国立劇場での歌舞伎鑑賞教室。あるいは、文楽人形浄瑠璃の鑑賞の機会をあたえるなど、授業を越えて、日本文化の理解に役立つ教育につとめた。 ③台湾庚寧大学での日本語教育実習を実施した。 ④「日本語学概論 A」は教職必修科目であるが、現代日本語も不十分な留学生も受けている。７０名にもなるクラスであり、２クラスに分けられたらと思う。 （２）今後の課題 ①「日本語学科」が「日本語・日本語教育学科」に名称変更を遂げたが、今後は、さらに国内外における日本語の教育実習の機会を拡充させ、日本語教師志望者の就職支援の充実を図りたい。
研究	（１）特筆すべき事項 ①『みんなの日本語中級Ⅱ』(2012、スリーエー・ネットワーク)を編集出版。 ②『人と教育』(2012、目白大学)に「短期日本語・日本文化研修(JALK)実施報告及び成果と課題」を寄稿(承認済)。 ③『異文化コミュニケーション』第１５号に寄稿(承認済)。 ④国際理解教育学会特定課題研究「文化的多様性と国際理解教育」参加。 ⑤「『訪れる』と格助詞の問題」『人文学研究紀要』目白大学２０１２ ⑥講演会研究発表「毛の国の文化―多胡碑をめぐって―」小平市。 ⑦「イサベラ・バードの視点からみるアイヌ人描写による一考察」『目白大学人文学研究紀要』２０１２ （２）今後の課題 特になし
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①日本語・日本語教育学科独自のインターンシップ制度に基づく派遣卒業生に対して、赴任前の日本語教授法の特訓を実施。 ②日本山西省交流協会主催の弁論大会において、目白大学中国学科学生、及び JALP 学生を指導特訓、優勝、入賞に導いた。 ③目白大学学生会留学生部会担当として、学生サミット、部会ミーティングの助言指導。 ④教職志望者に対する面談指導と、国語基礎力養成指導を授業外で指導。 ⑤時間の合間を縫って教育実習、介護実習先の学校を巡回し、指導を行なった。 ⑥キャリアデザインの授業構成にさまざま工夫をした(日本語教育の現場からの講演２。就職した先輩の体験談講演１など)。 （２）今後の課題 ①「日本語教師」の就職支援が必要と切に思われる。 ②「一般企業向け」もさらなる就職支援が必要だろう。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①日本に住む外国の子どもたちに対する日本語学習支援を応援し、社会貢献につとめている。 ②新宿区未来創造財団主催の「多文化交流フェスティバル運営ボランティア」として、学生を１名派遣。 ③新宿区大久保幼稚園学生ボランティアとして、学生を２名派遣。 （２）今後の課題 ①大学勤務の休日出勤の増加に伴い、通常の社会活動を阻害させるきっかけとなっている現状がある。制度的な改革が必要と思われる。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①インターンシップの実施(２名)。 ②『目白大学人文学研究紀要』編纂委員長。 （２）今後の課題 特になし
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 特になし

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	保健医療学部

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

保健医療学部３学科それぞれの学科運営を尊重しながら、月 1～2 回の定期的な学部・学科連絡会を行って共通の活動を促進することを目指して学部運営を行ってきた。平成 23 年度の教育、研究、社会貢献等については以下の通りである。

＜学部教育について＞

○医療系学部における基礎教育のあり方を検討し、平成 24 年度より基礎教育科目の一部を変更することとした。

○退学者、休学者の増加が問題点として認識され、各学科で早期発見と対応に取り組むとともに、学科間での情報交換や改善例紹介に努力してきた。

○実習施設について埼玉県、関東地域など近隣の施設の比重を高めてきた。また各学科とも円滑な学外実習実現のため、客観的臨床能力試験（OSCE）を導入して事前教育の向上を図るとともに、実習中は担当教員による実習支援体制を強化して、実習不適応者への減少に努めている。

○22 年度は作業療法学科、言語聴覚学科２科連携で実施した４年次科目「チーム医療演習」が平成 23 年度より３学科共同で可能となり、グループによる症例検討および報告を問題基盤型学習（PBL)方式で行った。

＜入学試験における定員確保＞

○PT の受験者の漸減、OT、ST の低迷を認識し、受験者数の増加のためにリハビリテーション職種の紹介 DVD の作成に学部として取り組むことになった。卒業生とその職場の応援も得て平成 24 年度 5 月の完成予定で作業を進めた。また特に作業療法学科、言語聴覚学科ではオープンキャンパスの他に特別体験プログラムを開催して、受験生確保に努めたが、作業療法学科は定員を維持したものの、言語聴覚学科は定員に満たない結果となった。

＜国家試験および就職に関わる対策＞

○国試対策委員会を年間５回実施して情報交換を密にし、模擬試験、受験勉強に関わる各学科の取組を相互に参考にしてきた。各学科とも、学科内での指導体制を強化して熱心に取り組んだ結果、新卒者については理学療法学科 96.1%、作業療法学科 88.4%、言語聴覚学科 91.4%と、いずれも合格率を上昇させ、全体平均をかなり上回る成果を得た。また教務・学生支援 G の支援もあり、国試合格者では就職率 100%を維持している。

＜研究について＞

○平成 21 年度から継続してきた学部教育に関わる特別研究を終了した。設定した５課題、①PBL(問題基盤型学習）、②初年次における対人関係技能・コミュニケーション力の育成、③臨床的知識の成績評価基準の明確化、④OSCE（客観的臨床能力評価）、⑤Web システムを用いた実習支援ツール開発のうち、①、④は各科とも演習型科目の授業に取り入れて定着させた。②については初年次については映像教材を利用した学習内容と方法がほぼ完成した。⑤は支援ツールは完成し、使用経験を重ねてブラッシュアップしていく段階になっている。③は継続が必要である。

○学部教員の研究意欲は高く、学会発表、学会誌等への投稿も、学科により差はあるが総じて高いので、それに応じて特別研究費、科研等申請率も高める必要があると考えられる。ただし実習支援、国試支援等により若手教員の勤務時間は長く、研究時間確保が岩槻キャンパス共通の課題である。

＜社会貢献について＞

○目白大学クリニックにおける耳鼻咽喉科診療及び言語聴覚療法に関わる臨床活動はますます発展し、地域医療に大きく貢献している。大学附属クリニックとして特色ある診療活動を重視する方向への転換を検討し、実現しつつある。

○23 年度に、岩槻区役所、さいたま市社会福祉協議会岩槻事務所等との地域連携推進の糸口が出来てきた。23 年度協力事業の一つとして、作業療法学科主導で目白発達研究会をたちあげることができた。

＜リハビリテーション学研究科開設について＞

○3 学科協力体制により大学院リハビリテーション学研究科の新宿 C での開講準備を進めてきたが、第１回入試の結果、1 期生 10 名を迎えることとなった。岩槻からの教員移動という条件下で教育活動を円滑に進めるため、運営組織を整備し、新宿事務局・大学院デスク等と連携して準備を進めた。

（２）今後の課題

○基礎教育科目の一部変更により、医療系（理系）の基礎科目及び初年次生対象のコミュニケーション演習の科目などを充実させたが、今後、教養科目も含め、大学全体での基礎教育の考え方との整合性の検討も必要と考えられる。専門科目では 3 学科共同のチーム医療演習の開始で、協力体制が一歩前進したが、今後は質の向上をはかるとともに、将来的には看護学科との連携・協力も検討することが必要である。

○国家試験対策は 23 年度については奏功し合格率をかなり向上させることができた。今後はこの成果を維持し、更なる向上を目指して、各学科それぞれの努力とともに学科間の連携をさらに進めたい。受験生の確保に関しては、作業療法学科、言語聴覚学科の特別体験プログラムを継続するとともに、学部制作の DVD を高校訪問などに活用することを含めて、更なる努力・工夫を続けたい。

○研究面では、学会発表等、日常行っている研究活動を科研費研究等への申請につながるよう学部教員を促していくとともに、研究環境の改善、研究時間の確保について事務局とともに検討することが必要だと考える。学部共同で取り組んだ特別研究（教育）は終了したが、その成果を日常化しさらに改善を図っていきたい。また一部終了できなかった課題は今後個別研究として継続していくこととする。

○社会貢献に関しては、目白大学クリニックの地域貢献にとどまらず、23 年度に発足した目白大学発達研究会の活動を具体的な第一歩として、今後さいたま市や岩槻区との連携をさらに前進させたい。

○保健医療学部３学科を基盤として、新宿キャンパスに開講した大学院修士課程リハビリテーション学研究科に関しては、第１期生は定員未達成と分野の偏りの問題がある。25 年度から PT、OT は第１期卒業生が社会人特別入試対象となるので、ターゲットを拡げる、入学相談会を増やす、実習地施設訪問時における入案配布・説明などの実施に努め、バランスの取れた定員確保に力を入れたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	理学療法学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①再試験回数や欠席が多い学生あるいは情緒不安定者の早期発見のため、個人面談・三者面談・オリエンテーションを重点的に実施し、その結果を学科内で共有し、学科教員全体で改善指導に取り組んだ。 ②遠隔地の実習施設との契約を解除し、良質な関東地方を中心とした実習地を新たに開拓した。 ③臨床実習におけるポートフォリオ導入効果を再度検証した。 ④知識・技術定着のために講義や実技科目における頻回な小テストの実施、授業展開の方法を見直した。 （２）今後の課題 ①知識・技術定着のための方法論の策定。 ②臨床実習におけるドロップアウト学生への対策とケアをさらに充実させる。 ③レポート・卒論における論理展開と文章作成能力の向上を図る。 ④実習における評価と治療を、ことばや文章だけではなく視覚的にも捉えられる工夫を推進する。
研究	（１）特筆すべき事項 ①大学生にｅーラーニングを用いた健康教育プログラムを開発した。 ②メタボリックシンドローム予備軍への発症予防研究を実施した。 ③保健医療学部共通のテーマである接遇を引き続き教育研究事業として実施した。 ④介護予防関係のプログラムを開発した。 （２）今後の課題 ①大学生を対象とした意識調査を実施し、介入教材の開発を推進すること。 ②実習地確保や実習訪問を効率的に実施し、研究時間を確保すること。 ③特別研究費や科研費などの外部競争的資金の獲得に全力を挙げること。 ④介護予防関連プログラムの実証研究を進めること。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①実習担当教員として、実習指導者と学生および学科間の連携を強化した。 ②臨床実習中の学生と週１回の情報交換を実施し、助言を行った。 ③態度・マナー教育を推進した。 （２）今後の課題 ①実習継続困難学生に対する学科と学生相談室のさらなる連携強化。 ②実習前特別講義の質的向上を図ること。 ③国家試験合格率向上のための指導の強化。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①卒業生・在校生対象の卒後教育の場である「目白大学理学療法学会」を開催した。 ②各自治体からの要請を受け、介護予防教室へ講師を派遣した。 （２）今後の課題 ①さいたま市と目白大学の共催事業のさらなる推進。 ②各自治体と連携し、目白大学が持つ知的財産を公開提供していく。 ③各実習地に講師を派遣し、良質な実習指導者養成に貢献すること。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①良質な学生確保のための方略を策定した。 ②理学療法学科倫理審査委員会を組織した。 ③理学療法学科として２年次から国家試験対策を導入実施した。 （２）今後の課題 ①意欲ある学生確保のためにAO入試の実施方法と合否判定法を検討すること。 ②担当教員の教育・研究レベルの向上と担当科目の定期的な見直し。　設備・備品の計画的更新。
その他	（１）特筆すべき事項 ①3 年生保護者会を開催し、臨床実習・卒業研究・就職・国家試験合格までのスケジュールと認識を大学と学生・保護者が共有した。 ②実習指導者会議を開催し、学生が置かれている状況を大学・施設間で共有し、連携して指導することを確認した。 ③実習前に主要施設の実習指導者から「実習に臨む学生の心構えと準備について」を開催した。 （２）今後の課題 ①良質な学生確保のために定期的に指定校の見直しや高校訪問実施。 ②良質で近距離の実習地を確保すること。 ③カリキュラム編成の見直し（基礎教育課程やチーム医療演習等）と実習時期の前倒しを検討すること 。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	作業療法学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①能動的学習の機会が増えつつある（基礎ゼミ、精神障害評価・治療学、チーム医療演習、etc）。 ②臨床実習についてはクリニカルクラークシップ普及のため啓発映像を作成した。 （２）今後の課題 ①アウトカムを重視した教育法を全教員が意識して行う。 ②上下の学生交流が進むような仕掛けを作る努力を行う。
研究	（１）特筆すべき事項 ①科研費等の外部資金獲得が進んでいる。 ②目白大学発達研究会を中心に研究成果による地域貢献事業が進んでいる。 （２）今後の課題 ①教員個人の研究とは別に、教育法や臨床実習方法についてさらに取り組む。 ②研究成果を地域連携や産学連携に活かして行く。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①東日本大震災により亡くなった学生の同級生と墓参りなどを通して心的ダメージを受けた学生の支援を行った。 ②臨床実習でつまずいた学生への個別支援を行った。 ③学力に問題のある学生については、保護者との面談など丁寧に対応した。 ④国家試験対策には教員全員が全力で取り組んだ。 （２）今後の課題 ①東日本大震災で犠牲になった学年が卒業するのが３回忌となるので、それまで手厚く同級生とご家族に支援を行う。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①目白大学発達研究会を立ち上げ、発達障害児の保護者向けに第１回研修会を行った（3 月）。 ②さいたま市と連携しながら、岩槻区との連携を進めることができた。 ③専任教員の専門性を生かした各種研究会・勉強会を行った。 （２）今後の課題 ①目白大学発達研究会の活動を継続する。 ②岩槻区と連携した活動を進展させる。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①大学院開設に向けて関係者が努力した。 ②学科内組織として、国家試験プロジェクト、受験生アッププロジェクト、地域連携プロジェクトが機能した。 （２）今後の課題 ①23 年度のプロジェクトに加えて、学生交流プロジェクト、基礎教育プロジェクトを設けて学生指導にあたって行きたい。
その他	（１）特筆すべき事項 ①学生募集の一環として、高校生向けの特別企画を実施した。 ②学生募集の一環として、作業療法学科公式ブログを開設した。 （２）今後の課題 ①今後とも実質的に受験者増を目標にあらゆる対策を行う。

目白大学・目白大学短期大学部 自己点検評価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	言語聴覚学科

項目	自己評価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①前年度の成果を踏まえ、専門教育における領域毎の状況や国家試験などについて学科教員が情報を共有しながら対応した。 ②OSCE の導入を１年次からとし、段階的に接遇から専門領域における検査まで評価ができるようにし、学生の問題点の抽出と個別指導の実施をはかった。 ③専門教育科目について領域ごとの評価の精度を高める検討を行い、個々の学生の問題点が抽出できるよう評価法の統一を図った。 ④基礎ゼミや言語聴覚障害学演習など１年次の学習について専門教育科目の導入を円滑にする目的で検討し、能力別グループ指導を徹底した。 ⑤チーム医療演習においてグループによる症例検討ならびに発表を理学療法学科、作業療法学科と共同で実施した。 ⑥摂食・嚥下障害学において、看護学科教員とともに吸引に関する演習を共同授業として実施した。 （２）今後の課題 ①入学者の学力差はさらに拡大しており、専門教育の導入に必要な基礎学力の向上について充実をはかる。 ②国家試験対策については早期からの取り組みとシステムの改変により成果を上げることができたが、今後も継続して実践する。 ③OSCE は演習科目の時間内に組み込んで実施してきたが、予算上の措置も必要となり、科目としての導入を検討する。 ④吸引に関する看護学科教員の授業、保健医療学部合同のチーム医療演習など、学部内、学部間で共同実施の科目の定着をはかる。
研究	（１）特筆すべき事項 ①学部共通のテーマへの取り組みを行い、フレッシュマンセミナーへの導入など、接遇教育の実施に貢献した。 ②学生の会話能力の向上をテーマとした特別研究を新たに開始し、総合評価演習などにおける場面を分析対象として学科教員全員での取り組みを開始している。 ③特別研究費や科研費など競争的研究資金の導入に努めた。 （２）今後の課題 ①科研費など外部資金導入への努力を継続して行う。 ②教育活動に割く時間が相対的に長い中で、教員個人の研究時間を捻出する方法について検討する。 ③特別研究などの枠組みにおいて学科教員全員が参加する形式で、本学科の教育の特色を示すことのできる研究を継続して実施する。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①担任を中心に、学生に細かく目配りをすることにより、個々の学生が抱える生活面、学業面、心理的側面などの問題を早期に抽出し、個別に対応し、教員間での情報共有に努めた。 ②臨床実習時には担当の教員と当該学生が随時、連絡を取る体制を作り、負荷がかかっている状況については早期から心理的サポートを行った。 ③国家試験の準備時期には、担当教員との頻回の面談や個別指導、集団指導を行い、国家試験前には 3 年生以下の在学生を交えて激励会を行った。 ④成績不良など問題のある学生については本人への指導だけでなく、保護者を含めた三者面談を随時実施し、保護者との情報共有と連携に務めた。 （２）今後の課題 ①学生の抱える問題をより早く発見する方略の検討を継続して行う。 ②学生の問題は多様化しており、適切に対応するために指導方法の充実を図る。 ③国家試験合格率の維持は重要な課題であり、実効性のある指導方法について教員間で検討を重ねる。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①目白大学クリニックにおいて高齢者から小児までの種々の言語聴覚障害に対応し、言語聴覚療法を実施した。聴覚障害乳幼児を対象とするクリニックのベビールーム活動（平成 22 年 5 月開始）に参加し、新生児期の聴覚障害診断後の家族支援推進に貢献した。 ②近隣の特別養護老人ホームやケアハウスが実施するイベントやその準備に学生とともに参加した。 ③桐榮祭に近隣の特別養護老人ホームやケアハウスの方々を招待し、学生が学内を案内した。 （２）今後の課題 ①近隣の特別養護老人ホームやケアハウスなどとの交流の機会を増やし、より日常的な交流が行えるようにする。 ②目白大学クリニックにおける言語聴覚療法の対象者の動向を見つつ、対象障害の種類による量的格差の是正に努める。 ③本学科が地域において実施できることがらについて検討を続け、外部に示していく努力を継続する。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①学生指導、国家試験対策など教員間の情報共有は充実してきており、体調不良者もいる中で、学科教員はそれぞれの持てる力を発揮し、補い合う体制を作り上げることができた。 ②年度末に教員が１名増員となり、複数の領域に対応できる態勢を構築しつつある。 （２）今後の課題 ①新たな臨床実習施設の開拓と経験の浅い実習指導者に対しても教育を行い、実習指導者の養成を行う。 ②まだ知名度が十分とはいえない言語聴覚士という職種の広報と DVD を用いた学科の特色のアピールを行い、入学希望者の増加をはかる。
その他	

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	総括評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	看護学部

自　己　評　価　※箇条書きにて記入

（１）特筆すべき事項

看護学部は、建学の精神である「主・師・親」に基づき、看護に必要な専門的な知識・技術を身につけ、実践力のある看護師・保健師の養成を目指すこと、また変革する社会に対応しうる人間性豊かな人材を育成し、「育てて送りだす」教育を具現化して行くことを目標としている。

平成２３年度の総括を各項目ごとに以下に示す。

＜教育＞

・保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正に伴う省令公布に基づき文部科学省に教育課程改正を申請し許可される。看護学科は平成 18 年開学以来、平成 21 年度にも省令改正あり、教育課程編成は 3 度目となる。学年の進行と共に旧カリキュラムと新カリキュラムの運営に教育の差が生じないよう努力してきた。さらには各学生の担任同士で連絡を密にして学生間に教育の問題が生じないよう配慮した。

・看護学部の看護学教育の特色として、基礎の学部教育、埼玉キャンパスで実施している看護学研究科ならびに平成 23 年度から開講した 2 つの認定看護師教育課程と異なるキャンパスで３つの教育課程を運営している。今後は本学の卒業生のキャリアアップのために、この 3 つの教育課程が十分機能するように運営に努力していきたいと考えている。「がん性疼痛看護認定教育課程」については教員の確保ができず、次年度は休講とすることが認定の運営会議で了承されたが、社会のニーズに照らし開講に向けて努力していきたい。

・臨地実習については、多くの施設に協力を得、円滑な実習が展開できている。今後は学生のレディネスに合った実習施設の整備と更なる臨床指導者との連携を密にして、学生の実習不適応者の減少等指導体制強化に努力していきたいと考えている。

＜研究＞

・科学研究費等補助金（外部資金獲得）は 461,5 千円の獲得であった。外部資金獲得については、申請する教員も年々多くなり学内では上位に位置している。また研究意欲は高く特別研究費獲得のため、学問分野毎に申請し徐々に成果を学会発表している。今後は臨床指導者を含む研究申請に努力し、臨床の質向上にも努力して行きたいと考えている。

＜学生指導＞

・看護学部の看護師国家試験合格率は 97,8%で保健師国家試験合格率は 90,8%である。二つの教育課程合格率を 100%になるよう努力していきたい。就職率は 100%である。

＜社会貢献＞

・看護職の職業団体である日本看護協会や高齢者虐待防止に関する電話相談等に協力してきた。今後は地域に開かれた学問の拠点として短期の研修などを計画し地域との連携を強化したい。

＜組織マネジメント＞

・年度初め学部長から学部運営の理念、教育方針等を提示し、看護学部の教育運営が円滑に運営できるよう努力してきた。
組織は教員会議、学科内会議共に１カ月に１回、委員会は夫々必要に応じて年間計画を立案し運営している。
また、学生からと非常勤講師からはカリキュラム評価のための会を開催し、その結果を夏季に集中会議でシラバスの検討と科目間のダブリ等がないように検討、次年度の教育に活かすよう努力している。

・教員の教育・研究活動は夫々計画した目標に照らして努力しているが、年々学生から生じる問題が多岐にわたっているため、教員の学生指導が複雑、困難を極めているものが多い。教員のストレスを少なくするためには研究日の取得努力が課題である。

（２）今後の課題

・看護学部は教育・研究・実践を柱とした「全人的ケアのための包括的看護教育システム」を構築し教育活働を実施している。次年度は更に教員間の連携を密にし、学生や研修生のための特色ある教育運営を目指して行きたい。
具体的な活動目標として
①実習施設の臨床指導者と学部の教員との有機的な連携を密にし、教育方法の改善と教育の質向上に努力する。
②研究活動については紀要や学会誌に積極的に投稿するよう努力するとともに研究日確保に努める。
③各教科目のシラバスの検討と教科目のダブリ等検討し、教育内容の精選に努める。
④看護師国家試験、保健師国家試験共に合格率 100%を目指す。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	学科用評価シート	組織名称 （評価単位名称）	看護学科

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令公布に基づき、文部科学省に教育課程改正を申請し、認可。 ②学生定員 80 名から 100 名への定員増の認可。 ③学生定員増に伴い、実習配置及び実習方法について、主たる実習病院実習担当責任者との連携会議を主催。 （２）今後の課題 ①保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令公布に基づく教育課程改正に学生定員増も加味した運営課題の継続検討。 ②実習指導の在り方に関する、実習施設と大学とのコラボレーションの可能性を継続検討。 ③新教育課程と旧教育課程の並行進行に伴う教育内容の煩雑回避のため、効果的運営方法の継続検討。 ④学部教育と研究科教育および認定看護師養成２コース教育の有機的・効果的教育活動の検討。
研究	（１）特筆すべき事項 ①個々の教員の研究促進と研究費（科学研究費、特別研究費等）獲得への努力。 ②主たる実習施設や看護協会等へ、「研究の促進と質の向上」を目的とした積極的な教員派遣と成果の獲得。 （２）今後の課題 ①個々の教員の研究促進と外部資金の積極的獲得の継続及び海外での研究発表および交流。 ②主たる実習施設および看護協会への教員派遣の継続。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①看護師国家試験合格率 97.8%（全国 90.1%）、保健師国家試験合格率 90.8%（全国 86.0%）、就職率 100%の成果獲得。 （２）今後の課題 ①多様な入学背景を持つ学生への教育方法の継続検討と定員増を踏まえた臨地実習指導方法の継続検討。 ②看護師・保健師国家試験不合格者のフォローおよび国家試験合格率の維持向上。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 ①地域に開かれた大学としての学部の課題検討と実践。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①教員会議、学科内会議、各委員会等の定期的開催と有機的運営。 ②夏季集中会議を開催し、当該年度の教育課程進捗状況と課題の確認および教育運営の中間的見直しと検討の実施。 （２）今後の課題 ①学部内組織の編成と役割分担の見直しと確立。 ②学部、研究科および認定看護師養成の有機的・効果的教育活動のための教員組織の検討。
その他	（１）特筆すべき事項 特になし （２）今後の課題 特になし

別　　科

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	別科用評価シート （別科長記入）	組 織 名 称 （評価単位名称）	日本語教育センター 留学生別科日本語専修課程(JALP)

項目	自　己　評　価　※箇条書きにて記入
教育	（１）特筆すべき事項 ①秋学期よりコースを新設、カリキュラムも改編した。コースはＡ．総合日本語コース（主に大学の学部進学者対象）、Ｂ．大学院進学研究コース（大学院進学者対象）、学習者のニーズに合わせ、日本語教育の高度化をめざした。 ②海外協定校の中国天津商業大学宝徳学院の学生を秋学期より 12 名受入れ、3＋１制度（3 年次まで本国で、4 年次は目白大学で単位履修し卒業認定）で　日本語教育を実施した。 ③「短期日本語・日本文化研修」を実施した。(2014 年 2 月 7 日～19 日・参加者 50 名)、日本学生支援機構より 1 人 8 万円の奨学金の給付を得た。研修に関しては学生から満足度の高い評価を得た。 （２）今後の課題 ①交換留学生に対するアカデミックジャパニーズ（大学で必要とされる日本語力）の指導をやカリキュラムの充実、環境整備をすること。
研究	（１）特筆すべき事項 ①文章表現教育研究会を常勤専任講師及び非常勤日本語講師で組織し、『目白大学高等教育研究』第 18 号に「目白大学留学生別科文章表現教育研究会活動報告」(2012.03) として成果を発表した。 （２）今後の課題 ②日本語能力評価に対する JALP 日本語スタンダーズを構築すること。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①進路ガイダンスを春学期より計画的に実施した。進学実績は「大学院進学研究コース」は全員大学院に進学、「総合コース」は大学進学 9 名、3 年次編入 1 名、短大 2 名、専門学校 10 名となっている。 ②学生の個人面談を実施し早期問題解決にあたった。日本語学習に関してはクラス担任、生活面に関しては国際交流サービスの双方で指導した。 ③春学期より学生の日本語能力向上と目白大学日本人学生との交流を目的にチュートリアルセッションを設けた。 ④天津商業大学宝徳学院（3＋１制度）の学生の卒業論文作成の日本語支援を 1 週間に 1 回実施し、全員卒業論文を予定通りに完成させた。 （２）今後の課題 ①来日目的を達成し、学習意欲を高めるため、学生のしつけ教育、来日時の初年次教育を行うこと。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①JALP 学生の受入先である中国江蘇省の現地日本語教師 22 名に対する日本語教授法講座（8 月 8 日～13 日）をボランティアで行った。 ②中井町内会との JALP 留学生・交換留学生との交流活動を通し、地域の国際化を推進した。 ③日本山西省交流協会と協力し「日本語・中国語スピーチ大会」を実施、本学より優勝・入賞者を輩出できた。 （２）今後の課題 ①中井町内会を中心に、留学生が日本人家庭を訪問でき、日本理解及び日本人との交流を進められること。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①平成 23 年度は春学期 60 名、秋学期 77 名、総計 137 名の留学生に対する日本語教育を実施した。専任講師 3 名と非常勤日本語講師をクラス担当に委任、コース中は日本語講師会議を 1 か月に 1 回開催し、クラス状況の把握、問題対応、情報の共有化を図った。 ②JALP 参加の学生募集の広報活動、日本留学フェア参加、友好関係促進のため海外提携校や関係機関訪問を国際サービスグループと行うため海外出張をした。(2011 年 5 月中国、2012 年 3 月ベトナム・中国) ③「短期日本語・日本文化研修」の企画から実施まで、国際交流サービスグループと協力し、無事終了させた。 （２）今後の課題 ①「短期日本語・日本文化研修」を実施する際、リスク管理を考えた実施体制を考えること。。
その他	（１）特筆すべき事項 ①2011 年 3 月 11 日に大震災が発生し、春学期は留学生の一時帰国避難や受講キャンセルが続出、秋学期にも影響が及んだ。日本全体で外国人の来日が大幅に減少し、日本語教育に影を落とした。 （２）今後の課題 ①目的意識が高く、良い留学生を安定的に確保する方策を考え、学生の夢を実現させること。

付 属 施 設 等

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	エクステンションセンター用評価シート

自　　己　　評　　価

（1）特筆すべき事項

講座（新宿）：マイナーな言語として「フィンランド語、スウェーデン語、デンマーク語、タイ語、台湾語、ポルトガル語等」を開講。
託児室を完備。

講座（岩槻）：目白大学公開講座：さいたま市との共催で行う医療系公開講座は、毎回定員を大幅に超える申し込みがある（抽選）。
（平成23年度担当教員は看護学部教員：「老いを生きる　～看護からのメッセージ～」と題して実施。定員100名。）
社会貢献グループとして赤字を出しながら、公開講座を実施している。

物的資源活用：教育研究に支障を来さない範囲で、有料で施設を学外諸団体及び企業に貸出ている。
平成23年度の施設貸収益は昨年度以上の増収で、エクステンションセンター全体の収益をも上回った。

（2）今後の課題

講座（新宿）：教室数の制約から開講できる講座数に限りがあるので、よりニーズの高い講座への転換を図る。
既に、大学等の講座は過当競争ですから、講座内容及び場所等で選ばれるエクステンションセンターを目指したい。

講座（岩槻）：目白大学公開講座は、広告費を減ずる等、収支バランスの検討が必要である。
（さいたま市よりの補助も少ないので、赤字をどこまで縮小できるのかが鍵になっている。）

物的資源活用：中高・大学・法人の各部門との連携強化により、物的資源の有効活用を促進していく。
但し、今後の施設貸出の課題は、学外諸団体・企業による「貸出件数の減少傾向及び使用教室数の減少・当日の時間節約」に対して、これまで以上の施設の貸し出し等を考慮した対策を検討していきたい。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	心理カウンセリングセンター用評価シート

自　　己　　評　　価

（１）特筆すべき事項

センターおよび分室の相談体制・相談業務の拡充
①H23年度の成果（実績報告）
センター(新宿)は23年度より週2日を午後8時までの開室とし、多様な相談ニーズに応える体制作りを進めた。
新規申し込み件数は昨年同様120件を超えた。分室は週6日開室(夜開室2日)とした。
新規申し込み件数は昨年度より伸び、60件となった。
②H23年度の成果に対する評価
新宿の来談件数は昨年度同様の高い水準を維持した。
分室は地域に定着してきたこともあり、件数増加傾向にある。

臨床心理学的知識および援助技術の提供による地域貢献
①H23年度の成果（実績報告）
a.セミナー形式公開講座(新宿；5講座)　参加者41名。
b.公開講座(分室)「親子の心のミゾ　～我が子の気持を理解するためにはどうすればよいのか～」（講師：小野寺 敦子）参加者60名
c.埼独立行政法人国立病院機構埼玉病院のメンタルヘルス事業の定着化
看護師だけではなく医師や一般職員への事業の周知のための打ち合わせやチラシの配布を行い、
今年度、数名のカウンセリング希望者があった。また、メンタルヘルスの予防的研修への要請があった。
②H23年度の成果に対する評価
セミナー形式講座、公開講座ともに好評いただいた。
分室が地域に定着してきており、埼玉病院の小児科や和光市役所などからのｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝの要請が
何度末に依頼が来るようになっている。

（２）今後の課題
分室の相談体制の整備
分室に対する地域の要望が多くなってきている。開室時間の拡充は図ったが、相談体制としては不十分で弱い面がある。
時間的かつ人員的な体制の強化を図りたい。

生徒相談室の相談機能の拡充
次年度より、従来より懸案事項であった目白研心中学高等学校への生徒に対する相談サービスの充実を図り、
中学校高等学校との連携を取りながら発達的問題を抱えた生徒の援助を強化していく。

地域貢献活動の拡充
・セミナー形式講座はセンター所員持ち回りで多様な講座を用意して定例化する。
・新宿および分室にて行う公開講座は時事を見て適切なものを企画する。
・埼玉病院小児科および和光市役所保健ｾﾝﾀｰからのｺﾝｻﾙﾃｰｼｮﾝ援助要請に応じて、センター長
および分室長などによる、コンサルテーションの援助を積極的にを行っていきたい。

修了生等の臨床心理士に対するフォローアップ研修制度の確立
かねてより、修了生のフォローを中心とした、研修体制の枠組みについて現在検討中である。
基本的には、まず心理学研究科が修了生で臨床心理士の資格を持っているＯＧ・ＯＢの組織化をすることが必要であり、課題である。
現在のところは準備段階であり、充分な検討の上、制度を開始する必要がある。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究所用評価シート	組 織 名 称 （評価単位名称）	教育研究所

自　己　評　価
（１）特筆すべき事項 ①プロジェクト研究について 次の2つのテーマについて調査研究を行った。 １．「大学教員の基本的な授業技術」　　２．「ICTを活用した新しい授業方法の開発」 ②所員会議について １０回実施した。研修会、公開講座の実施、紀要等の発行に関する査読など、教育研究所の業務内容が多岐にわたり、所員の負担が大きい。 ③ICT活用研修会 教員の授業力や指導力を高めるICT活用研修会を実施し、効果が得られた。 ④その他 ・高等教育研究の査読、人と教育の原稿の閲読に関する規定を定めて３年目。査読者側の技量が高まってきている。 ・高等教育研究の原稿締め切り厳守を敢行したことにより、投稿件数が10件程度減。 ・「人と教育」のデザイン一新２年目。学内、学外からの評価が上がっている。バックナンバーの送付も出てきている。 ・参加任意として実施しているICT活用研修会への参加者が20程度あり、教員の関心が高い。 ・印刷経費について合い見積もりを行っているため、DTPと印刷の質が良くなってきている。 （２）今後の課題 ・主体的に事業の充実を進めているが、助手の負担が増大している。 ・ＦＤ関係や初年次教育、Ｅラーニングなどの高等教育研究に関する内容が増加してきている。 ・これまでの教育研究所の業務を見直し、高等教育研究を中心とした教育研究所としての位置づけの検討。 ・兼任研究員だけでなく、専任教員（研究員）を配置し、研究機関としての適切な取り組みの検討と組織改革。 ・学生の基礎的な学力を高める内容について、他の部署と連携した検討が必要。 ・プロジェクト研究の各課題に対する進め方と、高等教育研究との関連の検討。 ・研究所の取り組みの公開や研究成果の発信として、ホームページなどを活用した宣伝活動の充実。 ・所員の学内での分掌としての位置づけが明確でなく、仕事内容の評価と認知度を高める必要がある。 →　教授会等での所員の公表

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	研究所用評価シート	組　織　名　称 （評価単位名称）	経営研究所

自　　己　　評　　価
（1）特筆すべき事項 ①大学院を中心にした多様なテーマによる大学院生や学部生の学習を可能にする公開講座の開催 ②公開講座のホームページ等による公開 ③学術論文のディスカッション・ペーパーによる公開と研究交流を通じた研究成果改善活動の促進 ④経営研究所ライブラリーの継続的発刊 ⑤経営学研究科との協賛による大学院生への教育支援の促進 （2）今後の課題 ①会計学以外の分野における資料収集の強化 ②経営研究所の方向性や特徴付けの明確化とその着実な研究成果の公表 ③日本における経営研究所の中で目白大学経営研究所の位置や分業の明確化とその特徴付け・差別化の促進 ④経営学部専任教員による研究成果公開の支援とその教育への反映 ⑤専任教員による事例研究やフィールド・スタディを促進するための研究支援 ⑥専任教員の研究活動を支援するための目白大学経営研究所ライブラリーの継続的刊行

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	目白大学クリニック用評価シート

自　己　評　価

（１）特筆すべき事項

＜教育及び学生指導＞

・言語聴覚学科の臨床実習施設としての役割を果たし、学生が将来言語聴覚士として活躍するための臨床現場を踏まえた聴覚医学の基礎を指導している。
・個々の言語聴覚士像が具体的に浮かぶ機会を増やすために、実際の症例を通したケーススタディを多く提供している。
・言語聴覚学科の授業及び総合実習演習により実践的な授業を展開している
・リハ大学院に講義に有効なソース提供を検討した。現場コメディカル就労者等が想定しうる学生に対し言語聴覚領域について症例のみならず早期発見や療育などの中長期での取り組み方について実例に基づいた実践的授業を行うことを目標としている。

＜研究＞

・サイトメガロウイルス感染による先天性難聴、遺伝性難聴に対する治療及び療育に力を入れ厚生労働科学研究などによる他施設との共同研究、早期発見のための検出キットの開発に取り組んでいる。
・進行性難聴予防のための抗ウイルス剤投与の有効性を検討している。
・0歳代乳幼児の聴力測定および補聴器適合、装用指導、聴覚管理に関する研究を進めている。
・ベビールーム（音と聴こえの教室）を開催し、難聴児の療育及び母子関係構築の場を提供し、これまで対象としてきた乳幼児の聴覚推移などのエビデンスに基づいた解析を開始した。
・ベビールームの実績評価を受け日本音楽医療研究会H24年度学会総会の開催校を引き受けている。

＜社会貢献＞

・社会福祉法人児童養護施設「子供の町」月2回検診。
・さいたま市岩槻区学校医「城南中学校」「和土小学校」「新和小学校」（３校）年1回健康診断。来年度より６校。
・さいたま市教育委員会修学時検診年1回（2校）
・埼玉県医療的ケア体制整備事業の実施に係る相談医、巡回医「埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園」年3回訪問。
・病診連携として岩槻地区の内科、脳外科、耳鼻科、小児科、整形外科と「目白大学クリニックめまい勉強会」開催。
・「埼玉県小児科耳鼻科懇話会」（対象約900名）代表世話人として事務局の運営を行っている。
・日本財団の招待によりベトナムdong nai provincial UNV、ろう学校へ視察を行った。
・ベトナム先天性聴覚障害頻度調査研究の現地医師との調査開始した
・NPO法人と目白大学による申請によりJICA研修の採択を受け、ベトナムでの滞在基礎調査：ベトナム出生児とリファラルシステムについての調査を行った。
・国内外の学会・講演会発表によりクリニックでの症例、研究や診療の成果を外部にも広域にわたり知らせている。
・クリニックの年報を発行し関係機関に送付、クリニックの成果を広く外部に知らせた。
・NPO法人、目白大学クリニック共同東日本大震災支援（宮城県名取市医師会より要請）

＜組織マネジメント他＞

・クリニック運営委員会で名称変更等がいよいよ本格的にとりあげられた。名称を含め、現在のクリニックの実態に合わせた軽微な調整が必要である。
具体的に専属事務長不在など構造の問題への解決がある。これらを問題として顕在化させ組織再構築のために運営委員会が機能を果たし始めた。
・患者満足度を高めるため、医療スタッフの接遇研修を行った。
・患者からのアンケートによる満足度調査を行いクリニックの現状把握と改善を行った。
・医療知識向上のため月1回スタッフの勉強会を行った。

＜その他＞

・インターネットによる患者受付・順番お知らせシステムにより混雑についてひきつづき情報開示を行った。

（２）今後の課題

＜教育及び学生指導＞

・言語聴覚士国家試験の出題基準の内容理解を深めより学生のレベル向上に努めていく
・授業と臨床、実践の統合をより強化していく。

＜研究＞

・新生児聴覚スクリーニング新制度の確立及びガイドラインの作成を行っていく。

＜社会貢献＞

・聴覚障害児支援のためのシステム構築を行い、県内でのイヤーセンター建設へ全面的な協力をしていく。
・ベトナム調査渡航により得た広域の母子保健ネットワークを維持し、ベトナム医師への技術移転に向け引き続き事務方は鋭意調査、研究支援とグッドコミュニケーションを維持する。

＜組織マネジメント他＞

・専任の高い使命感と機動力を生かし、他の雇用形態の就労者とのまとまりをよくする。

＜その他＞

・命綱である病診連携の維持を図るため引き続き事務による平素のコミュニケーションを維持する。
・日々の診療実績で目白大学医療分野のブランドイメージを大きく高める。

目白大学・目白大学短期大学部 自 己 点 検 評 価	メディカルスタッフ研修センター用評価シート

項目	自　己　評　価
教育	（１）特筆すべき事項 ①本学では、初めて認定看護師教育課程「脳卒中リハビリテーション看護」と「がん性疼痛看護」の２つのコースを開講した。 この教育課程は６カ月から７カ月に亘る短期間の教育期間で日本看護協会が認定している。教員は主任教員と専任教員の２名で担当することが基準となっているが、開講するにあたって「研修生便覧」「シラバス」「実習要綱」の作成、さらには年間行事、新規事業等準備に相当の時間を要した。 ②「脳卒中リハビリテーション」認定看護師養成の主任教員は、このコースを立ち上げるために日本看護協会認定部に働きかけ、愛知県看護協会で初めてコースを開設したことにより、愛知県看護協会の認定講師を務めている。 （２）今後の課題 ①看護学基礎教育の学生達に対して自己のキャリア形成について考える機会を設ける事を目的とした教育の企画と実施。
研究	（１）特筆すべき事項 ①脳神経外科疾患別看護マニュアル作成：武田保江共著、BRAIN　NURSING、2012 春期増刊メディカ出版。 執筆章は脳室ドレナージ術、脳槽ドレナージ術、減圧開頭術・骨弁除去術を担当した。 ②メディカルスタッフ研修センターにいる教員数が少ないので専門分野の研究を着手するまでに至っていない。しかし、卒業生の動向や教育活動等の実態調査等、経年的に実施するよう検討していく。 （２）今後の課題 ①認定看護師教育課程カリキュラムの検討をすることが最優先課題である。理由は授業内容にない科目や科目内容が重複しているものがある。
学生指導	（１）特筆すべき事項 ①2 つのコースとも開講初年度のため研修生の学習環境の調整と学習目標達成に努力した。特に「がん性疼痛看護認定看護師」コースについては、開講時に至っても専任教員が確保できない状況が起き、学部の教員に依頼して修了まで漕ぎ着ける事が出来た。 ②入学時の研修生の背景が異なるため、学習に個別差が認められ、学習進度に影響、グループ学習を強化した。 （２）今後の課題 ①個別面接の実施、個別の学習計画立案と適時グループ学習を導入する。 ②認定資格試験が看護協会で行われるため、卒業後に教員が勉強会を計画し、主要科目の学習を強化した。
社会貢献	（１）特筆すべき事項 ①平成 23 年 11 月 26 日(土)メディカルスタッフ研修センターに於いて公開講座の実施「がん医療の動向－がん治療における化学療法の発展」 対象者：医療関係者、大学院生、研修生、約 50 名の出席であった。 （２）今後の課題 ①認定の２分野においてその時代のタイムリーなテーマを取り上げ、年に 1 回程度の公開講座を開催する。
組織マネジメント	（１）特筆すべき事項 ①センター内スタッフ全体会議の実施：センター組織運営全般に関して各行事の企画、運営等 ②教職員との定例ミーテング；教育カリキュラムの運営、講師の調整と評価、研修生の学習姿勢等 ③大学内重要会議の報告・連絡事項：センター長より会議の報告・連絡等 （２）今後の課題 ①教育期間が短いため教員の異動が多い。1 つの認定コースが短くても 3 年間は継続できるよう維持していくことが必要である。 ②組織内の事務職員、教員の役割分担を明確にする。 ③組織内の業務内容、流れ等の見直しと改善を目的に全体会議を開催し、センター外施設に支障の起きないよう連絡を密にする。
その他	（１）特筆すべき事項 ①「がん性疼痛看護」認定教育課程が平成 24 年度は休講となっている。1 回生の教育だけで休校とするのか大学内で検討する必要がある。 メディカルスタッフ研修センターの開講の意義、将来性、看護学部にとっての今後の方向性等に鑑みて検討する。 ②メディカルスタッフ研修センターの新規事業の企画立案。 （２）今後の課題 ①新規事業として「和光 in オープン・キャンパス」を企画、検討していく。